

千島列島における第一のトポスの盛衰について

—「北方領土」と千島—

黒岩 幸子

要 旨 1955-56年の日ソ交渉を契機として、日本政府は、サンフランシスコ平和条約で日本が放棄した千島列島に南千島（択捉・国後）は含まれないとの立場をとり始め、それ以降、択捉、国後、色丹、歯舞は「北方領土」と呼ばれるようになった。「北方領土」が四島を指す固有名詞として定着すると同時に、千島列島は切断され、カムチャツカと道東を結ぶステップング・ストーン（踏み石）としての役割も、かつて列島全体に居住していた先住民の歴史も捨象されてしまった。千島列島には、先史時代から現在までに、先住民共同体、日本人社会、ロシア人社会という三つのトポス（場所）が生成している。本稿は、日本とロシアという近代国家の邂逅と国境画定のプロセスの中で崩壊していった千島の第一のトポス、主にアイヌ共同体の盛衰をたどることによって、北方領土問題の歴史的側面を明らかにするものである。

キーワード 千島列島、北方領土問題、日露国境画定、領土意識、先住民族アイヌ

はじめに

領土返還要求運動のテーゼとしてよく使われる「北方領土は日本固有の領土です」における「北方領土」が、戦後ソ連軍に占領されて今もロシアが実効支配を続ける択捉島、国後島、色丹島、歯舞諸島を指すことは、周知の事実であろう。しかし、このテーゼが、「領土は領土です」というトートロジー（同語反復）に過ぎないことに気づく人はどれだけいるだろうか。「日本固有の領土」に、その土地の連綿たる歴史を示すような固有名詞ではなく、「北方領土」という漠然とした呼称が与えられているのはなぜか。

日本政府は、「北方領土」を英訳では“The Northern Territories”、露訳では“Северные территории”と語頭を大文字にして、固有名詞として用いている。このような使用が日本国内で定着したのは、1960年代後半からの比較的新しい過去においてである。その事情を、日本近世史の研究者である菊池勇夫氏は、次のように説明する。

…日ソ交渉の中で、日本政府は「南千島」の国

後・択捉を今までソ連（ロシア）の領土になったことがない「固有の領土」であると主張しはじめたが、1951年のサンフランシスコ講和条約において千島列島を放棄していたという経緯があった。そこで国後・択捉は千島（クリル）ではないという論が組み立てられ、60年代に「北方領土」という用語が政府主導でひろめられるようになったものである¹⁾。

「北方領土」は、第二次世界大戦前から戦中は、日本が領土拡大を狙っていた朝鮮半島や中国東北部（旧満州）、樺太などを指し、また戦後は、アメリカに占領された南方領土（沖縄・奄美大島・小笠原諸島）との対比で、ソ連に占領された北方領土（南樺太・千島列島）として使われていた。現在の使用法としての「北方領土」が初めて国会決議に現れたのは、1962（昭和37）年である²⁾。さらに、1964（昭和39）年の外務省次官通達により、国後・択捉を指す「南千島」の使用が事実上禁じられたこと³⁾、「北方領土」と千島は切り離されていく。それは、「北方領土」問題から、千島の歴史、千島先住民の歴史が捨象されてゆく

プロセスでもあった。

しかし、本稿第一章で論じるように、「北方領土」の一部を、かつて日本人は千島列島と認識し、南千島と呼んで、そこに千島国という行政単位まで設定していた。また、そこにはその島々を生活の場としていた集団も存在した。カムチャツカ半島南端から北海道東端に連なるステッピング・ストーン（踏み石）としての千島列島には、先史時代から現在まで大まかに、先住民共同体、日本人社会、ロシア人社会という三つのトポス（場所）が生成している。そのトポスはそれぞれの成立圏、交流圏を変形させながら、一定の時間と空間で重なりつつ交替していった。

本稿は、「北方領土」という記号表現が措定された後に、その記号内容から抹消された「千島」を精査することにより、「北方領土」問題の意味をより鮮明にする試みである。特に、第一のトポスの盛衰に焦点をあてながら、日本人による千島の把握と領有意識、日露国境画定のプロセスを検討する。「北方領土」問題で対立する日口のいずれにも直接与することなく、一定の距離をおくがゆえに、日口双方から捨象される傾向にある千島先住民に注目することは、領土問題解決に必要とされる公正な歴史認識を持つことにも繋がるはずである。

日本人とロシア人による第二、第三のトポスの興隆の検証は、本稿に連なる今後の研究課題である。また、「北方領土」という用語は、日本に回復されるべき四島の地図をロゴとして流布されて、「北方領土」問題から千島通史という視点を退け、「北方領土」を千島列島から切断して、その連続性を見失わせているように見える。「北方領土」の記号化およびロゴ化のプロセスについても、さらなる研究課題である。

長らく日ソ/日口の係争地であることが、千島列島に関する学術研究を妨げていることに加え、日ソ/日口の「北方領土」論争の影響下で、学術的視点の公正さに疑念を持たざるを得ない研究も少なくない。本稿では主に、次の三分野の先行研究を参考として、「北方領土」を意識しながら第

一のトポスの消滅までの千島の歴史をたどった。まず千島列島の通史にあたるもの⁴⁾、次に、千島の先住民、特に千島アイヌに関するもの⁵⁾、最後に19世紀の日露国境画定に関連して千島を検証したもの⁶⁾である。

本稿は、まず、千島の地理的「発見」、その名称の確立をたどり（第一章）、先史時代からの千島先住民の盛衰を概観（第二章）、日本人の千島列島に対する領有意識の形成を検討し（第三章）、日露国境画定と千島先住民の関係（第四章）を明らかにする。むすびとして、戦後の千島アイヌの足取りを含めて、第一のトポスを考察する。

第1章 「千島」確立への遥かなる道のり

1. 名称「千島」の東漸

日本人の視野にわずかながらも千島が入ったのは、平安時代に遡る。ただし、初めから千島列島として認識されたのではなく、北東北から北海道一帯を一まとめにして、まだ明確な形を取らないままに漠然と「蝦夷ガ千島」と呼ばれたのである。12世紀半ばから和歌集や軍記ものに登場してくる「蝦夷ガ千島」とは、蝦夷（えぞ）の住む多数の島々を意味する。

いたけるもあま見る時に成りにけり えそか
千島をけふりこめたり⁷⁾

当時、大和朝廷から眺める奥羽以北は、「未開人」の住むもろもろの島で、その心象地理の北端は茫漠として海のかなた溶解していたであろう。

蝦夷の漢字表記には、「毛人」「夷俘」「夷狄」「東夷」「夷」「狄」などもあり、古代日本では「エミシ」「エビス」と読まれた。東北に住み、朝廷への服従を拒む「まつろわぬ者」「荒ぶる者」たちである。中国の王朝が、中華思想によって周囲の異民族を北狄（ほくてき）・東夷（とうい）・南蛮・西戎（せいじゅう）の四夷（しい）と呼ぶのを、日本の朝廷もそのまま持ち込んで、小中華を目指したのである。坂上田村麻呂（758-811）

も源頼朝（1147-99）も、朝廷から征夷大將軍の称号を与えられ、「討伐」「征伐」に東北へ向かった。朝貢する諸国を周辺にもつ中国を中心として、当時アジアに確立されていた国際秩序のなかに倭国（日本）もあったのだが、その日本もまた、自己を中心とする中央と周辺、文明と野蛮という二項対立のコンセプトを外部へと拡大させつつあった。

中世・近世になると、蝦夷や夷は、「エミシ」「エビス」に替わり「エゾ」と読まれるようになり、次第に先住民のアイヌだけを指す名称となってゆく。18世紀に日本の北辺に姿を見せはじめたロシア人たちは、「赤蝦夷」「北狄」などと呼ばれたが、このような呼称には常に、古代からの華夷意識が包摂されていたのではなかろうか。

「蝦夷ガ千島」は近世においてもなお、蝦夷が住む地として、北海道および千島列島を合わせた呼称として使われることがあった。鎌倉時代には、北海道には「夷島（えぞがしま）」「蝦夷島（えぞがしま）」が使われるようになり、江戸時代までには「蝦夷地」とも呼ばれるようになるが、北海道の奥にある未知の島々だけに「千島」の名称が使われるようになるのは、18世紀のことである。

千島列島の姿がはっきりと認識され、日露が通好条約によってウルップ（得撫）島と択捉島の間
に国境線を引いてから14年を経た1869（明治2）年、明治政府は国郡制を導入する。蝦夷、樺太、千島を踏査し、その実状に明るかった松浦武四郎（1818-1888）は、開拓使判官に任ぜられ、この地域の国郡名の選定にあたった。松浦は、松前・蝦夷地と呼びならわされた地方を「北海道」、千島列島のうち日本領である国後島と択捉島を一国として「千島国」と命名した。約700年かけての「千島」という名称の定着を、児島恭子氏は、「奥州からはるばると、えぞが千島の東漸である」⁸⁾と表現する。

日本北部を広域に渡って「千の島々」とした雑駁な認識は、その地域が中央支配に組み込まれ、北辺の地理も明らかになるにつれて、特定の地域の名称へと特化していった。千島の名称は、東北、北海道、千島列島を経て、最終的には国後・択捉

の二島のみの名称に落ち着いた。千島の東漸、収縮である。

千島国は、その命名から6年後の1875（明治8）年に、さらにウルップ島からシムシユ（占守）島までを編入して千島列島全島に拡大する。この年に千島樺太交換条約を締結して、日本は樺太をロシアに譲渡するかわりに、ウルップ島以北の千島列島も領有することが決まったためである。

1881（明治14）年に刊行された『小学唱歌集初編』に載った唱歌「蛍の光」には、歌詞が4番まである。戦後は1、2番だけが別れの歌として卒業式などで歌われ、3、4番はほとんど忘れられているが、次のとおりである。

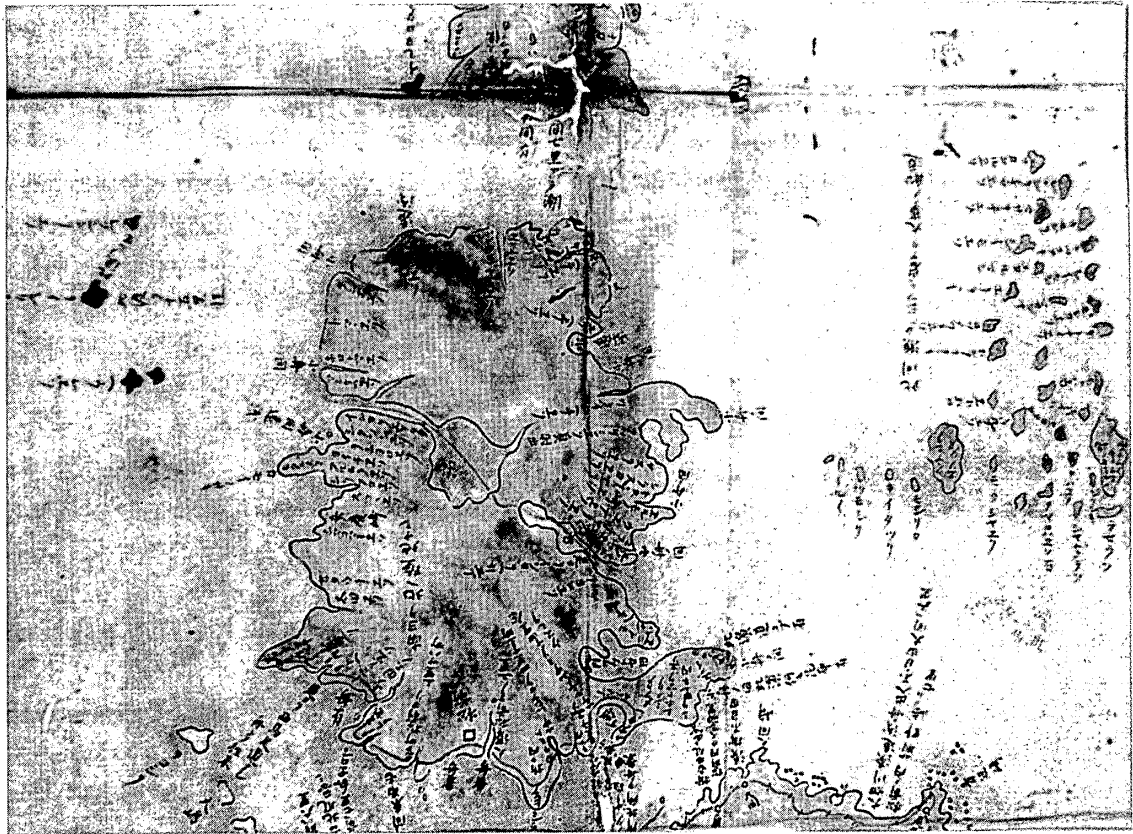
筑紫（つくし）のきわみ、みちのおく、
海山とおく、へだつとも、
その真心（まごころ）は、へだてなく、
ひとつに尽くせ、国のため。

千島のおくも、沖縄も、
八州（やしま）のうちの、守りなり。
至らんくくに、いさおしく。
つとめよ わがせ、つつがなく。

この歌は、かつて軍歌に分類されるものであったが、戦後はもちろん3、4番は学校で教えられなくなった。「千島のおくも沖縄も、八州のうちの守りなり」が歌われ始めたのは、1875（明治8）年に千島全島を、1879（明治12）年に琉球処分により沖縄を領有した明治政府が、その国家意識を版図の隅々まで漲らせていた時期である。新興国民国家の一員たる子供たちには、細長い日本という国家の北端と南端をしっかりと認識させることが肝要であった。

平安時代の知識人が、「えそか千島をけふりこめたり」と、遙かかなたに漠然と描いてみせた千島は、700年を経て、日本人、日本国家のアイデンティティーに不可欠の要素である日本領土として、はっきりとその姿を現した。

日清、日露戦争を経た大正時代には、「蛍の光」



図① 徳川幕府撰正保日本国図 (1664年)。(北方領土問題対策協会「北方領土返還実現に向けて 北方領土」パンフレット)。

4 番の歌詞の一行目は、「千島のおくも沖縄も」から戦果を反映した「台湾の果てもからふとも」に書き換えられた。しかし、戦争を重ねる毎に急速に拡大した大日本帝国が、アジアに君臨した時期は短く、1945 (昭和20) 年には明治以降に獲得したすべての領土を放棄して、日本の領土は、再び小さな日本列島に収縮した。「台湾の果てもからふとも」失い、「千島のおくも沖縄も」それぞれソ連と米国に占領された。17年後に沖縄は本土復帰したが、千島は今もってロシアの実効支配下にある。

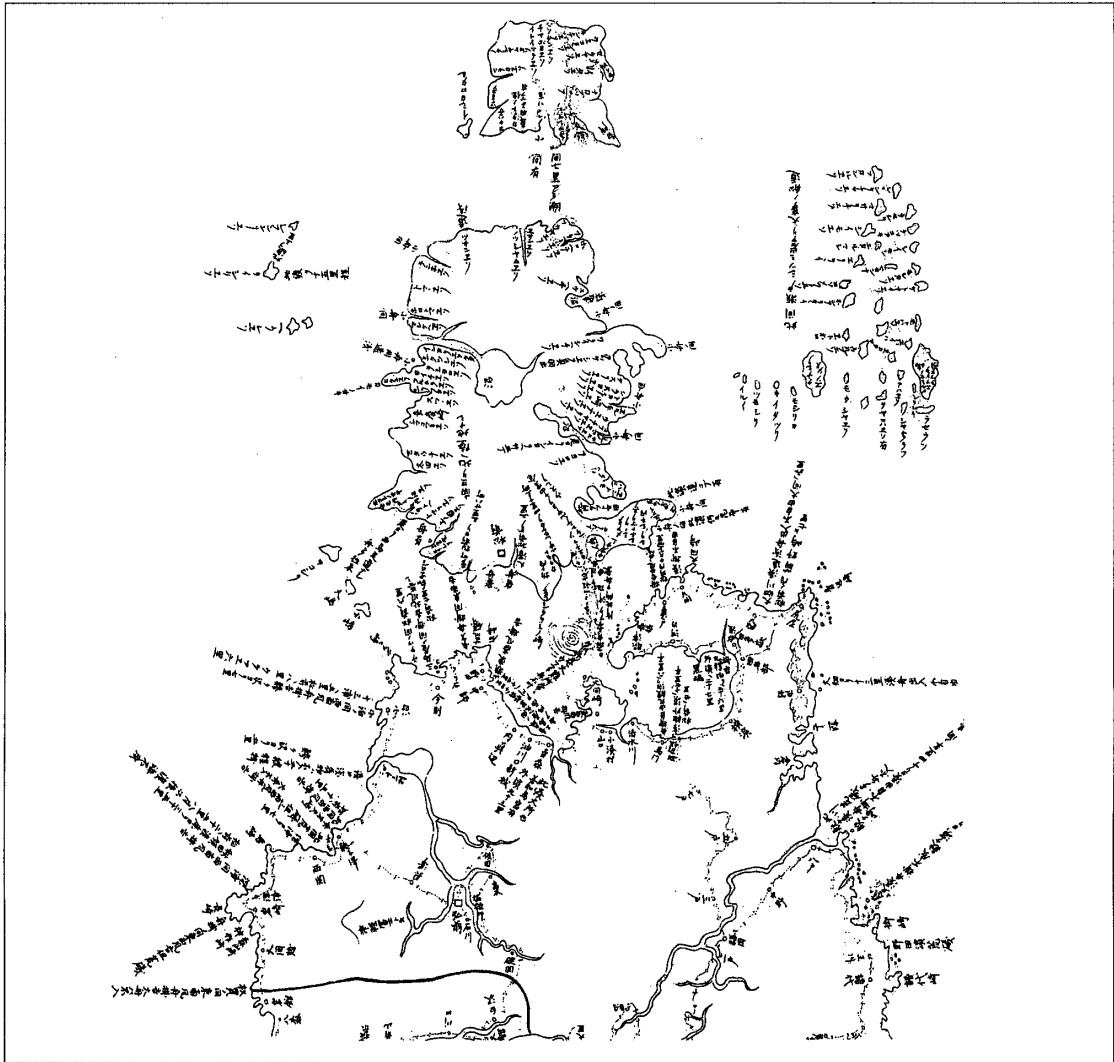
2. 地図の中の千島

地図は近代国家の必需品である。地図があって初めて各国の領土にそれぞれ色を塗ったり、国境線を引いたり、引き直したりできる。正確かつ精査な地図なくして、近代国家が領土を語ることはできない。

日ソ/日ロ間に領土問題が生じて以来、日本人とロシア人、どちらが先に千島を「発見」したか、どちらが先にどの島まで到達したか、どちらが先に正確な地図を作成したかなど、時には稚拙とも思える論争が闘わされてきた。日本あるいはロシアの方が先に千島を認識していた証左として、古地図が持ち出されることもある。

日本北辺の地形は、18世紀末に至ってもなお、その明確な姿を地図上に記すことを許さぬ地球最後の秘境の一つであった。北海道と千島列島も峻別せぬ「蝦夷が千島」という名称が、日本で数百年も使われたのは、日本人が自国の北辺地理に疎かったことにほかならない。

すでに鎌倉時代に、罪人の蝦夷嶋流罪の記録があり⁹⁾、その後も和人は北海道に渡って、江戸時代には松前藩というコミュニティーを形成したにもかかわらず、日本人は、その島の北辺に関心をもつことがなかった。道東の海岸線からは、歯舞



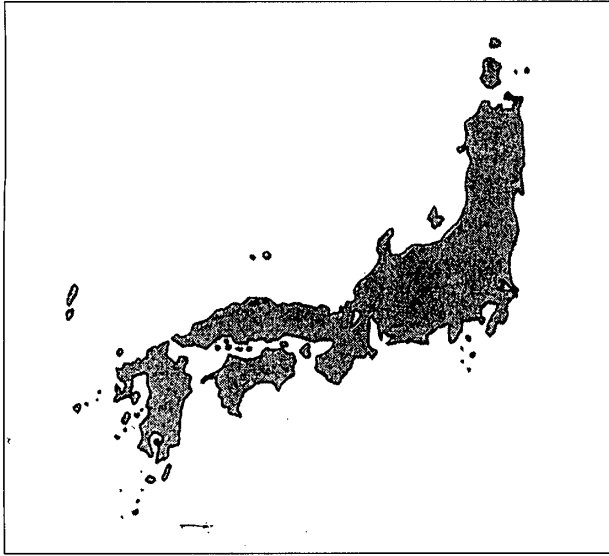
図② 「正保日本絵図」中より本州北部および蝦夷地の部分。(秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1999年、20頁)。

諸島や国後島が手に取るように見え、晴れた日には稚内からサハリン島が望見できるにもかかわらず、未知の北方への関心は日本人には希薄だった。日本人が北辺を本格的に踏査し始めるのは、ロシア人の南下に刺激されて以降の、国防意識に動機づけられてからである。

「北方領土」問題において、日本政府が固有領土の論拠として使用する地図に、「正保御国絵図」がある(図①)。領土返還促進のパンフレット等に必ず載っており、1644(正保元)年に江戸幕府が諸藩に国絵図の提出を命じたのを受けて、松前藩が提出したものとの説明が付されている。さらに、ロシア人が初めて千島を探検した1711(正徳

元)年よりはるかに先んじていたことが強調されている¹⁰⁾。

この「御国絵図」に描かれた蝦夷地と実際の北海道の地形との間には、大きな隔たりがある。約250点の地図・図版を収録した日本北辺地図学史の集大成である『日本北辺の探検と地図の歴史』には、パンフレットの地図よりも本州北部がさらに広範に示された地図が収録されている(図②)。こちらを見ると、本州北部が、現在の地図にかなり近いのに比べ、北海道は大きさも形もまったくかけ離れていることがわかる。蝦夷地は著しく小さく、樺太は蝦夷地よりさらに小さく、千島は36の一かたまりの島として描かれている。著者の秋



図③ 「正保日本総図」全体の輪郭。(秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1999年、19頁)。

月俊幸氏によれば、北海道が小さいのは、松前藩が指定された縮尺の地図を提出しなかったせいで、国後、択捉など地名が記されているが、その順番がでたらめなのは、実際に測量せずにアイヌからの聞き取りで書き込んだせいである¹¹⁾。そして、この松前藩の国絵図を、諸藩から集めて作った日本総図に合わせて見るならば、日本列島は、図③のような輪郭になる。現在の日本地図から北海道を消して、そこに小さな島を幾つか描いたように見える。

「北方領土」問題において、地図の持つ意味は大きい。「北方領土」を含む地図は、自由な縮尺を用いて切り取られ、シンボルとして記号として、至るところで使用されていく。恣意的に切り取られた地図は、そこに示された地域とそれを取り巻く地域との位置関係を切断し、その地域と周囲との有機的関連を見失わせる。蝦夷地と千島だけを示す国絵図は、日本人がロシア人よりも先に千島を認識したことを示すと同時に、全体像として提示するならば、日本人のその認識が、他の日本領に比べて極めて曖昧であったことも明らかにしてしまう。しかし、部分的に切り取られた地図からは、上記二つの情報のうち、前者しか伝わってこない。

日本人のみならず、ロシア人、西欧人にとって

も日本北辺は、長い間未踏の地であった。樺太とサハリンが二つの別個の島になっている地図、ユーラシア大陸上に蝦夷地が記されたり、蝦夷地がなかったり、小さかったり、逆に異様に大きかったりする地図と、日本北辺の地図は多彩である¹²⁾。秋月氏は、「欧州における日本北辺地域の地図は18世紀末頃までは非常な混乱を極めていた」、また、「日本人の北辺地図の製作は、松前藩の国絵図を別にすれば、西欧諸国と比べて百年余も遅れて始まった」と指摘している¹³⁾。

先住民を除いて、初めて千島に到達したのは、1643(寛永20)年に日本北方海域調査に訪れたフリーズ(Vries, Maerten Gerritsz, ? - 1647)で、その後140年を経て、ロシアのシュパンベルグ(Shpanberg, Martyn Petr, ? - 1761)、フランスのラ・ペルーズ(La Perouse, Jean François Galaup, 1741 - 1788)、イギリスのプロートン(Broughton, William Robert, 1762 - 1821)らが、日本からは間宮林蔵(1780 - 1844)や、近藤重蔵(1771 - 1829)などが活躍し、その名を世界地図に残しつつ、日本北辺地理を解明していく¹⁴⁾。

ロシア人および西欧人が北から千島や日本を訪れるようになったのは、地理上の関心とともに貿易を求めてのことだったが、日本は、その南下に危機意識を覚えたゆえに、長らく関心を持たなかった千島や樺太の踏査に着手した。19世紀初頭までかかった日本北辺地図の完成は、残り少なくなった世界地図の空白を埋め、日本を北方と、また世界と結節させる役割を担うはずであったが、現実には、むしろ北門を閉じる方向へと進んだ。

旧ソ連では、正確な地図は、国防上の軍事機密に関わるものとして扱われていたため、極めて入手困難なものの一つであった。千島(クリル)列島の詳細な地図が一般向けに発刊されたのは、1994年のことである¹⁵⁾。日本もまた、「北方領土」の誕生以降は、それ以前の地図を隠してきた。千島列島はウルップ島以北であり、「北方領土」は含まれないとする立場をとったため、その「北方領土」に「千島国」、「南千島」などと明記されている過去の地図は、好ましからざるものとなった

からである。

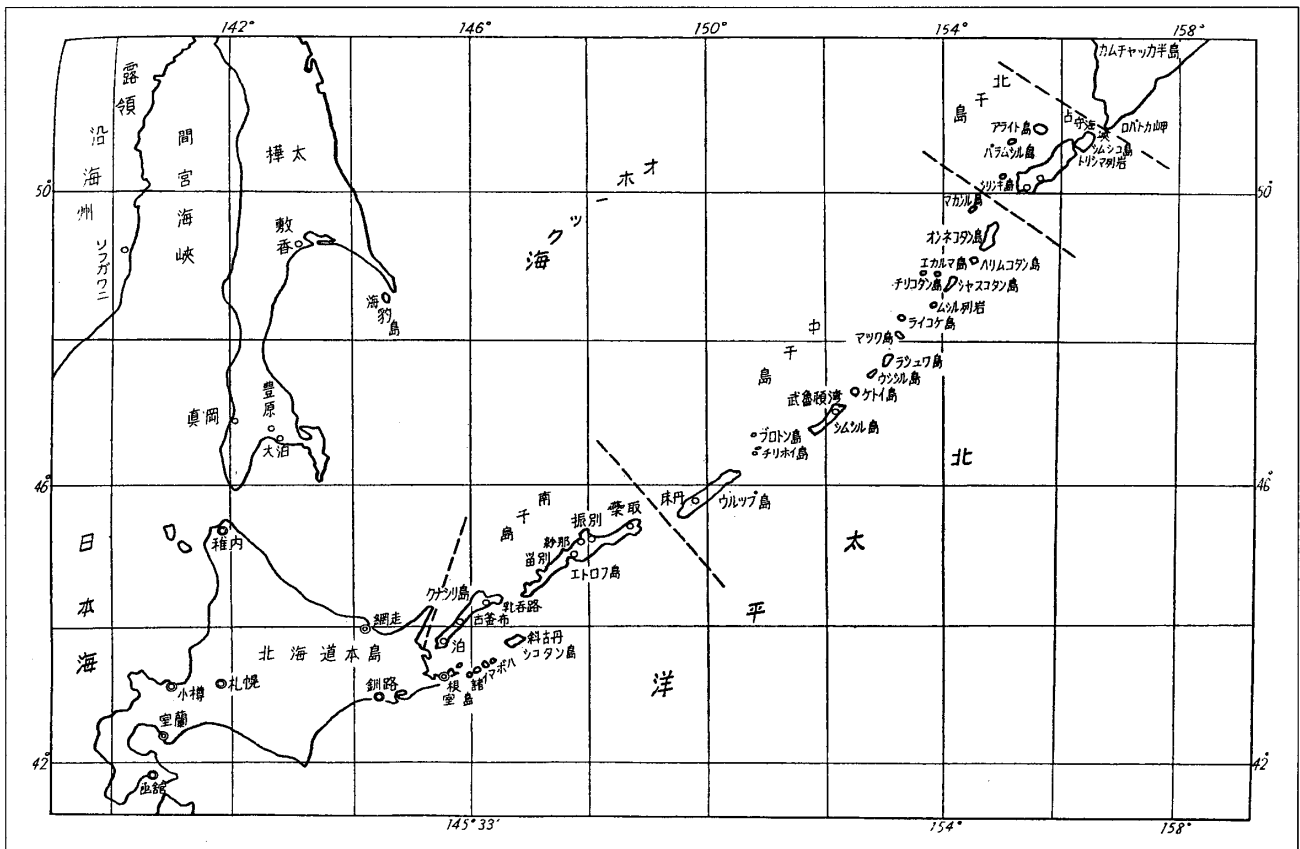
3. 千島列島・The Kuril Islands・Курильские острова

千島列島の名称と輪郭は、18世紀末までの数百年をかけて日本で緩慢に確立されてきた。正確には、されつつあるというべきであろう。「千島の範囲」は、「北方領土」問題における一つの重要な論点であり、未だ決着をみえていないからだ。国際的にはクリル列島と呼ばれている。ただし、日本による千島列島、ロシアによるクリル列島（Курильские острова）、国際社会での一般的なクリル列島（The Kuril Islands）の定義には、差異が生じている。

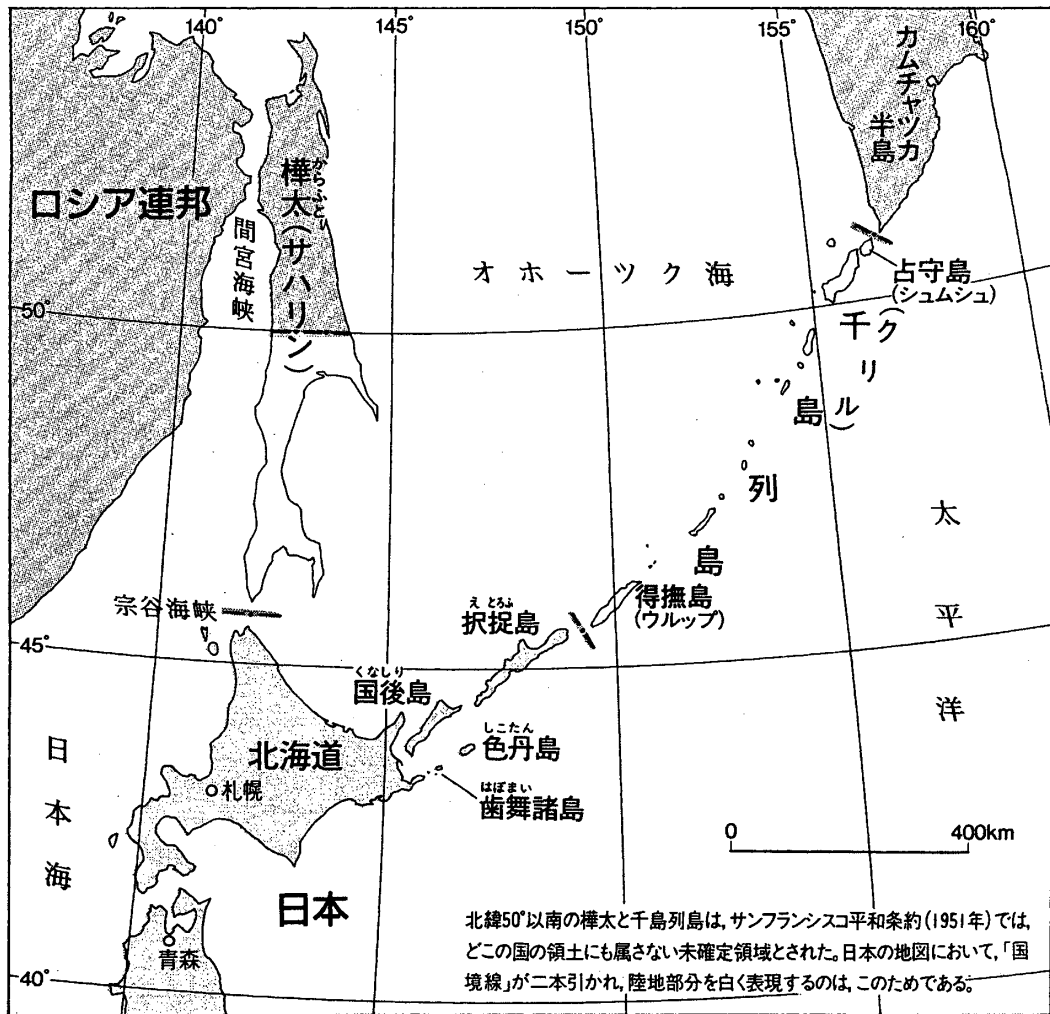
千島列島とは、カムチャツカ半島南端から北海道東部までの1200キロを延々と繋ぐ、大小30の島と多数の岩礁からなる列島である。総面積は1万平方キロに達し、最大の島択捉は、3000平方キロで京都府に匹敵し、パラムシル（幌筵）島も2000平方キロある。世界地図では、クリル列島

（The Kuril Islands）と表記される。日本では、千島列島を三つに区切り、北千島、中千島、南千島と呼ぶようになった（図④）。

ただし、日本における千島の範囲には変動がある。松浦武四郎は、明治初めに国後・択捉を千島国と命名したが、1875（明治8）年に日本が千島全島を領有すると、ウルップ以北もこの千島国に編入された。日露の国境線は北に移動してシュムシュ島とカムチャツカ半島の間になったが、当時、シュムシュ島に居住していたアイヌは、カムチャツカ半島と交流が深かった。日露が対峙する国境線付近に彼（女）らを留めることは不適切と考えた日本政府は、1884（明治17）年に、北千島アイヌを空島になっていた色丹島に移住させた。色丹は歯舞諸島とともに、千島国ではなく北海道の根室国に属していたが、この移住を契機に千島国に編入された。こうして千島国は、択捉・国後の二島から千島全島へ、さらには色丹島をも含めて拡大した。「南千島」という呼称も、択捉・国後二島



図④ 高倉新一郎『千島概史』（南方同胞援護会、1960年）より。



図⑤ 『環境と人間 新編地理A』(高等学校地理歴史科用文部省検定済教科書)、東京書籍、2000年、11頁。

のみならず色丹を含めた三島を指して用いられるようになった。

千島列島および歯舞・色丹の日本人元島民の多くが所属する団体の名称は、「千島歯舞諸島居住者連盟」であるが、これは、1884(明治17)年からの行政区分に忠実に、千島列島および色丹島を「千島」とし、それに根室に属した歯舞諸島を合わせた結果である。

後に、日本政府は、サンフランシスコ平和条約で放棄した千島列島に国後・択捉は含まれないと主張するので、色丹はもちろん、国後・択捉を南千島と呼ぶのは不都合になった。そこで南千島が抹消されると共に、北・中・南の区分そのものも使用されなくなる。1960年代以降の日本政府の公式地図は、地図⑤で示されるとおり、シュムシュカ

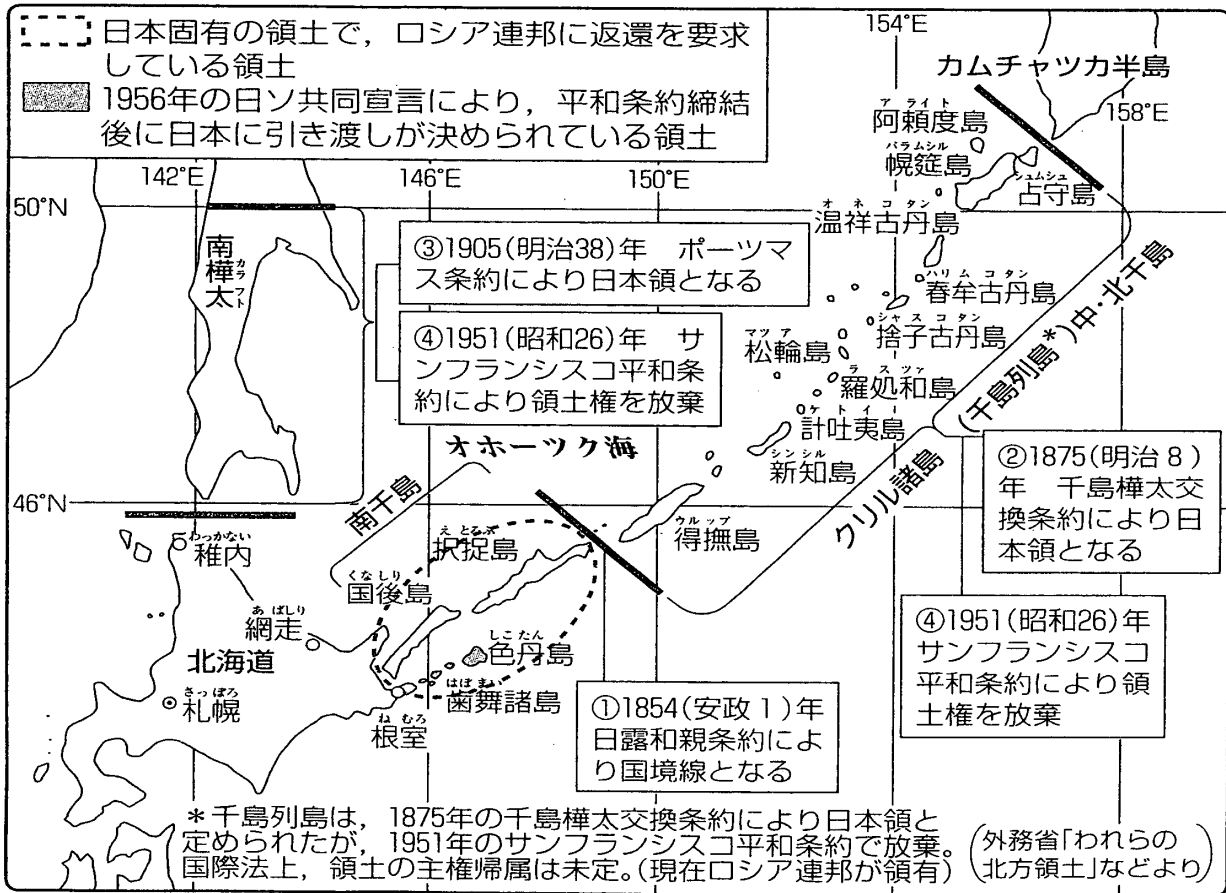
らウルップまで、つまり、北千島と中千島のみを千島列島と記す。

国際的な地理学上の常識と食い違う日本の立場を、下斗米伸夫氏は、次のように説明する。

国後島と択捉島はロシアのカムチャツカ半島から北海道東部までオホーツク海上に連なる火山島列島のいわば南端に位置する。実は地理学的にはこれらを千島(クリル)列島と呼ぶのだが、政治的には違うらしい。北方四島を「固有の領土」と主張する日本政府は、千島列島の中に択捉・国後の両島は含まない方針を採ってきた¹⁶⁾。

換言するならば、「千島列島は、地理学的範囲と政治的範囲という二つの異なる範囲を持ち、政

●北方領土



図⑥ 浜島書店編集部『最新図説 政経』浜島書店、2002年、214頁。

治的範囲は、択捉・国後を含まない。なぜならば、日本政府が含まない方針を採ってきたから」ということになる。地理学的な範囲とは関係なく、日本政府は千島の中に南千島を含まないことにし、その方針を進めてきたのである。

1970年代から、日本の学校教科書は文部省教科書検定により、政府見解と一致するように千島列島の範囲が設定されるようになる。ウルップと択捉間に国境線が引かれ、千島列島はウルップ以北に限定される。ただ、カムチャツカから北海道まで密に連なる列島を分断して、その三分の二が千島列島で、残り三分の一は千島列島ではないという地図は不自然である。そのためか、図⑥のように、地理的千島と政治的千島を混同した地図も出現している。

この地図は、高校の社会科科目「政経」の参考書として使われている資料集に収められたもので、「北方領土問題」という項目で、日露の主張や領土問題に関する年表が1頁にまとめられている。ただ、そこに示された地図は、右下に「外務省『われらの北方領土』などより」と出典が示されているが、日本政府の主張とは矛盾している。というより、この地図自体が矛盾している。シュムシュからウルップが「クリル諸島(千島列島)中・北千島」と表示され、北方領土にあたる部分に「南千島」と記されているのだ。

この地図は、日本政府の主張の矛盾を上手く地図で説明しているかのようだ。これに従うならば、千島列島は中千島と北千島で、南千島は千島列島ではないということになる。千島列島の範囲は、

日口間はもちろん、日本国内でも統一見解を持っていない。はるばる東漸した千島は、今日なお曖昧さを残して地図上を漂流している¹⁷⁾。

日本政府は、1980年代から本格的に、海外の地図に「北方領土」が日本領として明記されるように働きかけてゆく。その結果、それまでソ連領として明記されていた地図に、「ソ連が統治、日本が異議申立て」「ソ連が占領」などの記載が入ったほか、はっきりと日本の領土に色づけした地図も現れてくる¹⁸⁾。しかし、さすがに日本政府は、日本の主張に沿って、択捉・国後を除いてクリル列島を短くしてくれとまでは申し入れできなかったらしく、クリル列島は、依然シムシユから国後までとされているのが主流である。

ロシアの「クリル列島 Курильские острова」には、千島列島に色丹島・歯舞諸島が加わる。「大クリルおよび小クリルの二つの平行する群島から成る」¹⁹⁾と説明され、色丹・歯舞は「小クリル」と呼ばれる。クリルという名称は、千島列島に火山が多く煙を噴いているところから、ロシア語の「クリーツァー (куриться 煙りを出す、くゆらす)」を語源とするとの俗説があるが、ロシア人が訪れる前から、先住民のクリル人に由来する「クリル」が使用されていたことが明らかになっている²⁰⁾。

日本人も、北千島アイヌを近年まで「クリル人」と呼んでいた。1998年6月、色丹島に日本語で「クリル人墓地」と書かれた標柱が現れた。終戦時、約1万7千人の日本人が居住していた「北方領土」には、合わせて52個所の墓地がある。ソ連に占領されてからは、ほとんどが放置されてきたが、1997年から日本政府による墓参未実施墓地の実態調査が始められ、2001年までにロシア国境警備隊駐屯地内にある一個所(国後島セセキ墓地)を除く51個所が確認された²¹⁾。確認された墓地には、当時の墓地名を書いた標柱が建立されており、その一つが「クリル人墓地」である。

クリル人墓地は、すでに述べたとおり、1884年(明治17年)にシムシユ島の北千島アイヌが、色丹に強制移住させられた後にできたものだ。ほとんどがロシア正教徒で、島にはハリストス正教会

が建てられ、そのそばにクリル人は埋葬されるようになる。その後入植してくる日本人の「斜古丹墓地」とは別に、「クリル人墓地」があった。この二つの墓地が近かったこともあり、近年の墓地調査では一個所にまとめられて、今は、「斜古丹墓地」と「クリル人墓地」の二本の標柱が立っている。

第2章 第一のトポス-先住民共同体-の盛衰

1. 千島史の空白

千島という名称が確立し、地図の中でその位置が確定される遥か前から実際の列島が存在したように、その島々における人間の営為もまた太古から存在したことが知られている。

千島列島に人が初めて足を踏み入れたのは、旧石器時代に遡る。北はカムチャツカからシムシユ島に、南は北海道から国後・択捉に、南北から旧石器人が移動して千島に足跡を残している。紀元前6千年から紀元8世紀頃までが縄文時代・続縄文時代で、続縄文時代に重なって5世紀から10世紀はオホーツク文化期に入る。オホーツク文化は、日本列島で発生した縄文文化とは異なり、サハリン、北海道オホーツク沿岸、千島列島に広がっており、その一帯に居住した北方諸民族が担った海に依存する文化である。このオホーツク文化にさらに重なって、8世紀から12、13世紀までは擦文文化時代が続く。擦文文化は、本州の土師器文化の影響を受けて成立した、北海道を中心とする文化である。これらの時代の遺跡は、千島列島の随所に今も残されている²²⁾。

擦文文化時代以降の14-16世紀の千島列島は、考古学上のわずかな遺跡しかなく、文献にも登場しない空白の時代である。「千島通史」の著者である川上淳氏は、「遺憾であるが現状ではこの時代を埋めることは困難であるので」と断り、14-16世紀を飛ばして17世紀の論述に入っている²³⁾。同氏の述べる「遺憾である現状」とは、日口の研究が協力して研究にあたれぬ状況を指すのであろうか。確かに、千島は今も残された秘境であり続けている。日本国民は、日本固有の領土である

「北方領土」へかかってに行くことはできない。実効支配されているロシアのビザを取得して行くことは日本の法的立場を害するとして、閣議了解によって日本国民は、「北方領土問題の解決までの間、これを行わないよう…要請」されているからだ²⁴⁾。ロシア人にとっても、ソ連時代のクリル列島は軍事機密に関わる閉鎖地域として、自由な立ち入りは禁止されていた。

ステファン氏も、千島の先史の解明が不十分であることを次のように指摘する。

われわれの無知については、少なくとも部分的には、政治的障害に責任がある。その障害は、ロシアおよび日本の研究者が、その列島において合同探査による発掘を行うことを阻んできたからだ²⁵⁾。

日本人、ロシア人、西欧人が千島に到達して後の、誰が先に「発見」したかの論争についても、同氏は、「決して純粋に学術的なものではない」とする。「列島に関する露日の敵対が、その問題を、ナショナリスティックな修辭で政治化し、かつ気まぐれな改竄で混乱させた」²⁶⁾からである。

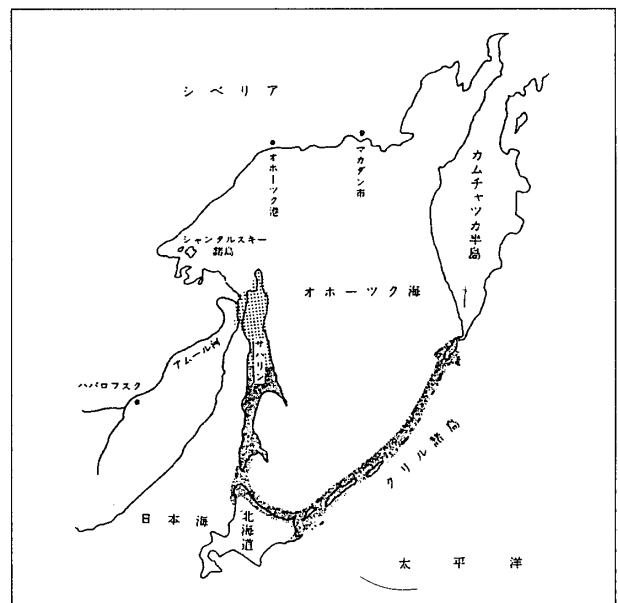
1992年に始まったビザなし交流では、毎回必ず、日ロ双方の参加者による対話集會が開かれる。交流が始まった当初、日本側団員から、「ロシアのみなさんには正しい歴史を認識していただきたい」という発言が何度も繰り返された。ただし、ここでいう歴史とは、「北方領土」がかつて日本領であったこと、特にソ連軍が侵攻してきたのは1945年8月15日以降であったことなど、限定的な歴史の断面である。千島の先史どころか、有史以降についても、日ロ双方の歴史認識はあやふやであった。「北方領土」に関する日本側の歴史は、「北方領土は日本国民が開拓し、父祖伝来の地として受け継いできた日本固有の領土です」、「北方領土は私達の祖父母が血と汗で開拓した土地であり、彼らは今もそこに眠っています」²⁷⁾から始まる。父祖伝来とはいつ頃からを指すのか、祖父母が血と汗で開拓を始めたのはいつからか、明示

されたことはない。

なお、「血と汗で開拓」の決まり文句は、ロシア語に訳す場合には「血」は省いて、「汗を流して開拓」にする方が好ましいというのが、通訳者の間での共通の了解であった。この場合、ロシア語で「血」を使うならば、ロシア人は文字どおり、流血を伴う開拓、つまり、戦闘による殺戮を交えての開拓を連想する可能性があるからだ。小さな島国で明治期までは比較的安定した統治の歴史を持つ日本人と、膨張を続けながら広大なユーラシア大陸を東岸まで征服したロシア人が、過去の「血」から受けるイメージは、大きく異なる。

2. 異文化交流の最前線として

歴史の空白はあるにせよ、先住民は、日本人とロシア人が千島に来るまでに、数千年の時間の流れとともに一つのゆるやかな共同体を築いていたことが知られる。彼（女）らは、千島を「チュブカ」や「クルミセ」と呼んでいた²⁸⁾。近代国家の領土意識に制約されぬその境界は、地勢や気候など自然界の条件に沿った形で広がった。たとえば、オホーツク文化分布圏を示す図⑦からは、オ



図⑦ オホーツク文化分布圏略図。北構保男「オホーツク文化研究の過去・現代・未来抄」（北海道・東北史研究会編『メナシの世界』北海道出版企画センター、1996年、35頁）。

ホーツク海を取り囲むようにして千島列島、北海道北岸、サハリンに同質の文化が伝わったことが一目瞭然である。アレウト人は、北大西洋をカムチャツカ半島沿岸沿いに南下し、千島列島を通り抜けて北海道に渡り、オホーツク岸を北西に進んで宗谷海峡を超え、樺太に渡ってオホーツク海周辺に広く分布したという説もあるという²⁹⁾。このような自然な人や文化の流れを、近代国家成立後のこの地域は、一切拒んで今日に至る。

千島列島に形成された第一のトポス、つまり先住民の共同体は、18世紀から本格的になった二つの近代国家の南北からの挟撃に遭い、解体される。共同体形成プロセスの長さ比べ、その消滅までの道のりはごく短いといえるであろう。同化と同義の近代化、国民国家への労働力としての取り込み、独自の文化や言語の喪失、同化後の更なる差異化、差別など、地球上の異なる大陸や文化圏にありながら共通性をもつ先住民の近現代史が、千島列島にもまた刻まれている。

千島アイヌは、日本人やロシア人との接触後も、ある一定の時期までは、その基底的生活構造を完全には崩壊させることなく暮らしていた。彼(女)らは、明確な政治機構をもたず、血縁からなる家族集団が首長のもとに小規模なコタン(村)をつくり、漁労・採集経済を営んでいた。千島北部のアイヌと南部のアイヌでは生活形態が異なっていたが、民族的共通性のある一つの文化圏であったことは確かである。

北千島アイヌは、列島北端のシュムシュ、パラムシル、中部のラショワ(羅処和)、ウシシル(牛知)、シムシル(新知)などに居住していた。18世紀中頃にロシア人が行った調査では、シュムシュに3部落44人、ウシシルに男子のみで262人との記録があり³⁰⁾、厳しい気候の中で、わずかな人口が広範な島に散在していたことがわかる。彼(女)らは完全な定住者ではなく、1、2年で家族を連れて海獣をとるために他の島へ移動することもあったため、正確な人口の把握は難しかったという。カムチャツカ半島南端に居住していたカムチャダールやアレウトとの交流があり、婚姻

関係を結ぶことも多かった。

一方、択捉以南は、北海道との繋がりが強く、北千島アイヌに比べると定住度が高かった。北海道の厚岸(アッケシ)の有力アイヌであったイコトイは、数十人の手下を連れてウルップまでラッコ猟に出かけたりしていた。ウルップ島には定住の形跡がなく、北部アイヌ、南部アイヌの入り会い地になっていたらしい。

列島北部はカムチャツカの少数民族と、列島南部は北海道アイヌとの関係が深かった千島アイヌに、北からはロシア人、南からは和人が関わってくる。千島は、あたかも日口宿命の対決の舞台であるかのようだが、実は、両者が初めて接触した歴史的ミーティング・ポイントにはかならない。初期の日口接触の場面には、通詞としてのアイヌの姿が頻繁に登場する。北千島アイヌはロシア語を、南千島アイヌは日本語を解するようになり、今でいうバイリンガルやハーフたちが、異文化交流の最前線で活躍した。

千島列島という飛び石に住み、独自の交易ルートを持っていたアイヌを媒介に、日本国内からユーラシア大陸の奥まで、ダイナミックな物流も可能だった。アイヌによるアムール沿岸の北方民族との交易を介して満州と繋がった山丹(さんたん)交易は、日本に中国から唐衣(蝦夷錦)や宝石、雑貨をもたらした。こうした北方交易は、江戸からペテルブルグまでの物流すら可能にし、ロシアのルーブル銀貨が根室に、日本の漆器がユーラシア大陸の奥まで移動したのである³¹⁾。

鎖国日本では、出島だけが唯一の外界への窓であったというとならえ方は、近年の研究で見直されている。長崎口のほかに、対馬口、薩摩口、松前口が開かれて、琉球、朝鮮、中国などと繋がり、松前口はアイヌ交易を介して、北方に開かれていた³²⁾。日露の国境線確定により、この北門は、逆に固く閉ざされることになる。その後の日露関係は、千島列島を「北門の鎖鑰(さやく)」³³⁾として固定化すると同時に、そこに構築されていた第一のトポスの存続を許さなかった。

3. 第一のトポスの滅びへの道程

「北方領土」元島民の生の声を採録した『四島(しま)を追われて』³⁴⁾には、不当な占領の事実が風化せぬように、奪われた故郷の記憶が失われぬようにと、ソ連軍の千島侵攻に始まり、1947(昭和22)年に日本人全員が四島から追放されるまでの様子が、当事者たちによって語られている。土足で居間に上がり込んできたソ連兵を見た時の恐怖、顔に墨を塗って隠れた若い女性たち、わずかな身の回り品を積み、深夜に手漕ぎの船で根室に逃げ出した家族、戦後の混乱のなかで生活の基盤を奪われた島民の苦悩と怒りが、生々しく伝わってくる。

『四島(しま)を追われて』は、千島列島における第二のトポスの崩壊の記録である。一方、この崩壊と近接した過去に起きたにもかかわらず、第一のトポスの崩壊の記録は漫然としている。その最大の理由は、当時のアイヌ民族が筆記をもたなかったことであろう。アイヌ自らが、その共同体の破綻のプロセスを書き綴ったならば、日本人元島民の記録の何倍もの慟哭の手記が残ったはずだ。第一のトポスの住人が死滅したために、口承による記録も残されていない。

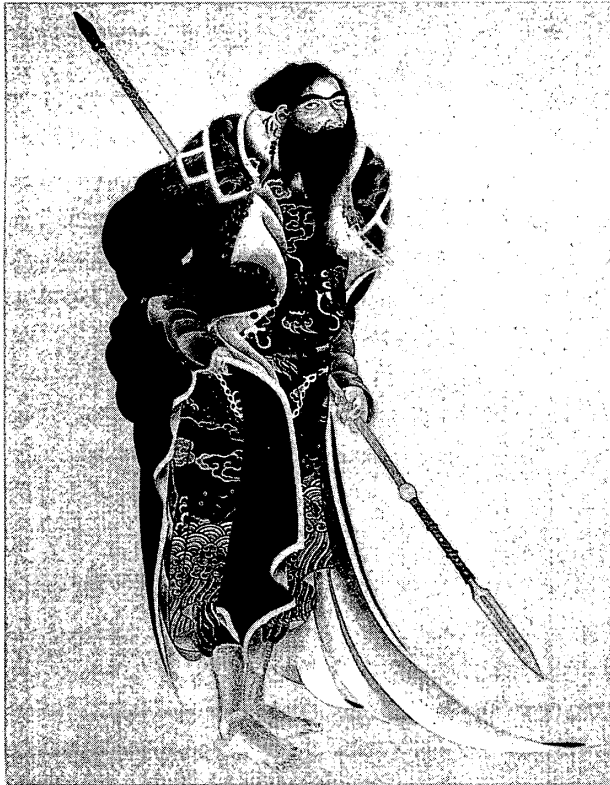
従って、第一のトポスの解体プロセスは、当事者以外の他者の言葉を繋ぎあわせて再構成するしか方途がない。他者が認識した対象物として語られるうえに、日本人、ロシア人、イギリス人、オランダ人など様々な語り手の認識は、否応なく各々が持つ一定の関心によって導かれる。探検家として、測量者として、民俗学者として、行政官として、支配者として、交易者として、友人として、敵として、各々が自らの関心に基づいて観察し、語るのである。さらに、そこには、未知のものに対する恐怖、「未開人」に対する侮蔑、異質なものに対する好奇心、悲惨な境遇への憐憫、自然との調和と知恵に対する賞賛など、各々の印象と評価が加わる。こうして、幾層ものプリズムを経た認識から、アイヌの内在的ロジックを推察することは困難であろう。

このような難題に取り組んで「近世アイヌの日

本人認識」を論じた、菊池勇夫氏の試みがある。それによると、日本人もロシア人も、初めからアイヌの抑圧者として登場したのではなく、シシャム(シ：真の、シャム(サム)：隣人)と呼ばれていた時期もあるという³⁵⁾。実際、松前藩は、アイヌとの接触の始まった当初は、できる限りアイヌと和人を隔てて、幕府に隠してその取引の利潤を独占しようと腐心した。和人とは言葉も通じぬ異文化として、アイヌを差異化しておく方が好ましかったのだ。取引においてはウイマムやオムシャ、紛争の調停においてはツクナイのように、アイヌ独特の慣習も取り入れられた³⁶⁾。

しかし、江戸後期の商品経済の発展により物流が活発化し、蝦夷地の海産物が交易品としての価値を高めるにつれ、アイヌはその産業構造に急速に組み入れられていく。特に、一定の運上金を松前藩に納めることにより、漁場の経営権や交易権が個別の商人に与えられた場所請負制度は、アイヌ社会を決定的に破壊した。幕府はおろか松前藩にも干渉されることなく、請負商人は利潤追求に専念し、「場所」内部では支配人、番人、出稼ぎ和人のあらゆる横暴が放置された。第一のトポスの解体は、極端な労働力の搾取と性の奪取に起因する。アイヌの男性は漁場の労働力として死に至る苛酷な労働を課せられ、女性たちは、単身で場所に入る和人男性の絶え間ない「密夫」(性暴力)に曝され、妻妾化された。そこには、典型的な内国植民地の様相が見られる。アイヌは、入植した和人とは別に、地元の人、土地の人という意味で「土人」と呼ばれるようになるが、その後「土人」が、外国植民地の「野蛮な原住民」を指して侮蔑的に使用されていくことと符合している。

家庭を持ち子供を育てることが不可能なまでに追い込まれたアイヌの抵抗と蜂起は、散発的に起こった。アイヌに対する暴力ではひけをとらなかった、ロシアの徴税人チョールヌイら21人は、択捉とウルップのアイヌによって1771(明和8)年に殺害されている。1644(正保4)年に蝦夷地でシャクシャインの大規模な蜂起が鎮圧された後の、アイヌによる最後の抵抗は、1789(寛政元)



図⑧ アッケシ総首長イコトイ。(「夷酋列像」、根室歴史研究会『クナシリ・メナシの戦い』1994年より)。



図⑨ クナシリ総首長ツキノエ。(「夷酋列像」、根室歴史研究会『クナシリ・メナシの戦い』1994年より)。

年に国後島および根室海岸部一帯でおきたクナシリ・メナシの戦い（寛政蝦夷騒動）である。国後島の飛騨屋久兵衛請負場所における和人の横暴に端を発した偶発的な蜂起は、対岸の根室に飛び火し、和人71名が殺害されるに及んだ。アイヌ首長の協力を得て鎮圧されたこの蜂起は、アイヌの首謀者37名の処刑をもって終焉する³⁷⁾。江戸幕府は、蜂起の背景に実際にはなかったロシアの関与を疑い、北辺への危機意識を強めた。

事態が終焉した後、鎮圧に功績のあったアイヌの首長12名の肖像画（「夷酋列像」）が、松前藩の家老で優れた画人でもあった蛸崎波響（1764－1826）によって描かれ、天皇の目に触れるほどの評判を呼んだ。華麗な衣装と独特の小道具で奇抜なポーズをとる12人の威風堂々たる姿は、エキゾチシズムに満ち溢れて、今もなお見る者の目を奪う。わけても、アッケシの総首長イコトイは猩猩緋（しょうじょうひ）と呼ばれた深紅のロシア製の長衣を（図⑧）、国後総首長のツキノエは豪華

な蝦夷錦を纏って（図⑨）、異彩を放っている。37名の処刑者のなかには、ツキノエの息子セツハヤフもいた。三白眼、手足の甲や指先まで黒々と描かれた体毛、被髪、左衽（左前）などから、描き手の強い恣意性は読み取ることができて³⁸⁾、被写体であるツキノエらの胸中を推察することは難しい。

根室市の納沙布（ノサップ）岬から歯舞諸島の貝殻島まではわずか3.7キロ、日本人が建てた灯台が傾きながらもまだ建っているのが肉眼で見える距離である。その納沙布岬の最先端に、根室市指定文化財（史跡）「寛政の蜂起和人殉難墓碑」がある。そして、その細い木製の標柱の隣に、白い囲いを持つ大きな墓碑「横死七十一人之墓」がある。同じ岬には、粗末な着物の老婆と子どもが、自分の故郷を呼んでいるのであろうか、悲痛な面持ちで口に手を当てて何か叫んでいる彫像があり、台座には「呼び返せ北方領土」と題字がある。また、二階建ての「北方館」には、領土問題の公

的歴史を勉強できる展示と共に望遠鏡が設置されており、晴れた日には「北方領土」の島々が手に取るように眺められる。ただし、ここにアイヌの悲痛な歴史を物語るものはない。寛政蝦夷蜂起の犠牲になった和人を弔う碑はあるが、その際の処刑者はおろか、生活の基盤も家族も奪われた数多くのアイヌを鎮魂する碑は見当たらない。

寛政蝦夷蜂起で中心になったアイヌ37名が処刑されたノッカマップは、納沙布岬からそう遠くない根室半島の海岸にある。1974年から毎年、北海道アイヌによりイチャルパという供養祭がノッカマップで行なわれるようになった。深夜のイチャルパを終えると、翌日、彼（女）らは、納沙布岬の「横死七十一人之墓」に向いて和人の供養も行う。

第3章 日本北辺における領土観形成プロセス

1. 日露接触と対露観

千島列島のうえで日露の国家意識がぶつかりあうようになるとともに、第一のトポスは衰退し、いくつかのメルクマールを通過して消滅に至る。クナシリ・メナシの戦いは、その最初のメルクマールであったといえる。蜂起から3年後の1792（寛政4）年、蜂起の現場に近い地点にロシアの公式使節団が現れた。エカテリーナ女帝（Ekaterina II, 1729-96）の命を拝して、日本との通商関係の樹立を希望するアダム・ラクスマン（Laksman, Adam Erikovich, 1766-?）の一行であった。こうして、日露交渉史の第一頁が、千島列島の南端に向かい合う根室から始まった。

ラクスマンの来訪は、ロシアと日本に挟撃されながらも、辺境の地として完全な支配を免れていた千島の歴史に終止符を打つものだった。両国間の曖昧な緩衝地帯として千島を残すことはできなくなり、二国間にはっきりと境界線を引く時期が迫っていた。その線は、第一のトポスを真二つに分断し、崩壊させるに十分な威力を持っていた。

日露の最初の接触は、ラクスマンの来訪より早

く、1778（安永7）年に起こっている。この年シャバーリン（Dmitrii Shabalin）が、ロシアに帰化したアイヌのチーキンを通詞として、国後の首長ツキノエの案内でノッカマップを訪ね、松前藩に交易を求めている³⁹⁾。さらに遡って、日露の間には百年を超える非公式な交流史がある。根室に來航したラクスマンの聖エカテリーナ号には、11年目に帰国を果たした大黒屋光太夫（1751-1828）ら3人の日本人漂流民が乗っていた。草の根の日露交流史は、先住民や日本人漂流民が入り混じった多数の漂流譚から構成される。先住民は、様々な交易品だけではなく、日露の人的交流をも媒介していたのである。

ロシア側に記録された最初の日本人伝兵衛（デンベイ）は、クリル人の捕虜になっているのをコサック隊長のアトラソフ（Atlasov, Vladimir Vasil'evich, 1661?-1711）に見つけられ、ペテルブルグまで連行されてピョートル大帝（Pyotr I, 1672-1725）に謁見した。ロシアにおける第二の日本人サニマ、その後のソーザとゴンザ、大黒屋光太夫の一行、世界一周する仙台漂流民の一行も、カムチャツカ半島やアリューシャン列島に漂着し、アレウト人やカムチャダール人と遭遇している。1806（文化3）-1843（弘化2）年にかけて奇跡的に帰国した6グループの漂流民は、いずれも択捉および国後に送還されており⁴⁰⁾、まだ列島を自由に行き来していた千島アイヌの協力を得て帰還が可能になった。択捉への送還について、菊池勇夫氏は、択捉が幕府によって開かれた最北の境界前線基地であることを、当時ロシア側が認知していた証左と見ている⁴¹⁾。

踏み石、飛び石としての千島列島を通過して、日露間を往来した漂流民たちの経験は、漂流譚として江戸庶民の間に広く流布した。200年に及ぶ鎖国体制下で、日本人は外界の情報に飢えていたのであろう。将軍の侍医で蘭学者の桂川甫周（1751-1809）が大黒屋光太夫らを聴取してまとめた『北槎聞略』（1794）や、同じく仙台藩の蘭学者である大槻玄沢（1757-1827）が、1804（文化元）年にレザノフ（Rezanov, Nikolai

Petrovich, 1764-1807) 使節とともに帰国した仙台漂流民から聴取した『環海異聞』(1807)などは、今なおロシア事情の優れた紹介書である。

日本人の対ロシア観のプロトタイプを創設したと言われる工藤平助(1734-1800)と林子平(1738-93)は、いずれも大槻玄沢と同じ仙台藩士である。江戸時代後期の優れた蘭学者が、辺境とされた東北地方に多かったのは偶然ではなかろう。鎖国期とはいえ東北は、ある程度、北方へ開かれていた。中央からは、取り残され遅れた僻地と見える辺境は、実は、外界に開かれたフロンティアでもある。中央の直接的拘束から一定の距離を持つことのできた、その地の知識人が外界への指向性を有したのは、自然な流れであったろう。

18世紀末になると、千島列島上での先住民、日本人、ロシア人の接触は、単なる辺境で起きた事件ではなく、日露の国家関係として捉えられ、知識人、政治家たちが、対露政策を意識するようになる。1783(天明3)年に工藤平助が老中田沼意次(1719-88)に提出した『赤蝦夷風説考』は、前述のシャバーリンと松前藩の接触が外に漏れ聞こえたことにも刺激されて書かれており、ロシアとの交易を勧めた一種の開国論で、田沼意次の重商主義に見合ったものだった。ロシア人の千島南下は貿易の希求に基づくものであり、ロシアとは敵対するよりも交易により良好な関係を結ぶべきと述べた「ロシア宥和論」である。一方、ベニョフスキ(Benyovsky, Moric Aladar, 1746-86)の虚偽の情報⁴²⁾にも刺激されていた林子平の『三国通覧図説』(1785)および『海国兵談』(1787-91)は、ロシア人の千島南下を日本に対する侵略とみなし、国防の必要性を説いた「ロシア脅威論」である。

このロシア宥和論と脅威論は、その創出から2世紀以上を経た今日に至るまでなお、日本人が超克できぬ二元論であり、日露/日ソ関係が俎上に載ると必ずといってよいほど登場する。幕末の日露交渉、世界大戦後の日ソ交渉、近年の日口領土交渉と並行して、日本国内で宥和論と脅威論がせめぎあい、ロシアに対し歩み寄ろうとする宥和論

者は、国内の脅威論者の説得に対口交渉と同等、あるいはそれ以上のエネルギーを払うことになる。日露交渉とは、同時に日々交渉を意味する。この二元論は、その後のロシア革命とソ連邦の成立により、イデオロギー性を帯びて増幅され、日露/日ソ間に何度も起こる戦争や紛争という極端な状況によっていっそう定着し、日露外交の場だけでなく、日本の政界、財界、アカデミズムにまで浸透しているように見える。

日本人が一定の対ロシア観を有するようになると、当然、それを反映した対ロシア政策が取られ、ロシアとの接点である千島はその具体的施行の場となってゆく。千島はもはや、松前藩の裏庭ではなく、明確な国家意識に包摂されるべき要地である。そして、その要地の居住者に対しては、対ロシア政策と整合性を持つ新たな政策が向けられた。幕府のアイヌ政策は、場所請負商人の個々の利潤追求が結果的にアイヌの共同体を破壊したのとは異なり、その組織的解体をもたらす権力特有の決定的な力を持っていた。

2. 北辺の領土意識

国境線がはっきりと引かれ、国ごとに色分けされた世界地図は、私たちにとってすっかり見慣れたものであるが、このような地図が一般的になったのはそう古いことではない。地球の丸い表面が、緯度と経度の柵目の中に平面的に移され、一枚の長方形の紙に収まるようになったのは、1761年の経度測定器発明以降のことであり、その柵目の中の空白がすべて埋められたのは19世紀に入ってからだ。国ごとの色づけは、帝国国家がその植民地を帝国の色で染める慣行が浸透したものである⁴³⁾。

日本の教科書の世界地図には、いまだに空白地帯がある。サハリンの南半分とウルップからシュムシュまでの中部および北千島は白抜きになっている。この空白部分は、日本がサンフランシスコ平和条約で放棄した領土だが、どの国に対して放棄したかは明記されなかったのも、まだロシア領とは認められないという日本政府

の見解を表したものである。そのため、地図上の日本北辺には、二重の国境がある。一本目は宗谷海峡と択捉・ウルップの間に引かれ、二本目は、サハリンの北緯50度と、ペールヴィ・クリリスキー海峡（カムチャツカ半島と千島列島北端の間）にある（前掲図⑤）。

日本の地図に、このような奇妙な国境線ができるまでには、日露間での紆余曲折があるが、実は、日本もロシアも近代まで、このあたりの境界線には無頓着だったのである。それがいつのまにか、双方が、それぞれの主張する一本の線に異様な執念を燃やすようになってゆく。これについて、木村汎氏は次のように述べる。

地球の隅々において僅か一センチメートルの曖昧さも許されないまでの厳密な国境線引きが行われている。また、日ロ両国間において北方四島の帰属が執拗なまでに争われている。このようなことを当然視する現代世界の住人にとっては容易に信じ難いことかも知れないが、千島列島、樺太、その周辺に関する明確な国境意識が日ロ両国民に芽生えてから未だ僅か100年余ばかりの歳月しか経過していないのである。…北方領土問題があまりにも激しい政治紛争の種子となったために、あたかも日本とロシアそれぞれが歴史の初めから国境をめぐる激しくいがみ合っていたかのように誤解される風潮を導いたのである⁴⁴⁾。

「北方領土」領有の正統性の根拠として、日露双方が、より早くより広く千島列島を統治していたと主張する傾向があるが、19世紀まで双方は、明快な境界意識も確固たる支配意識も持ち合わせていなかった。だからこそ、アイヌの北方交易が、日本人やロシア人の進出後も一定期間続いていたのである。

…露日の国境地帯は、長い年月をかけて、ほとんど知覚できぬように発展し、その間、近代的な意味での国境線というものとは存在しなかった。19世紀まで、ロシアにも日本にも、その主権がクリ

ルのどこまで及んでいるかという明確な認識はなかった。外交関係も外的刺激もなく、両国は、（クリル）列島のステータスを曖昧なままにしておいたのである⁴⁵⁾。

千島だけでなく蝦夷地（北海道）についても、日本の領有意識は曖昧で、国境線どころか、そこが日本の内なのか外なのか、近世まで明確な概念はなかった。菊池勇夫氏は、近世日本人の領土観について興味深い考察を示す。確かに、幕府編纂の「正保日本図」（前掲図①）に蝦夷も千島も含まれているので、日本の内側に位置づけられていたと解釈できるが、「現実感覚からすれば、異国・異域としての蝦夷地、その住民は体制外の『夷狄』としての『蝦夷』存在であると、思っていることのほうがふつうであった。…蝦夷地は、内でもあり外でもあったような、領土観念の幅を認めなければならぬ⁴⁶⁾ という。このような領土観念は、ロシア人の南下によって修正を迫られる。

蝦夷地を日本の外と意識しながらも日本の勢力下にあると考えてきたのであったから、新たな外国勢力の介入が気になりだすと、自分たちの権益のある地域だと主張しはじめるのは、国家意識というものであろう⁴⁷⁾。

ロシア人の千島南下を日本への侵略と捉えた林子平について、菊池氏は次のように論じる。彼の『三国通覧図説』の三国は、朝鮮、琉球、蝦夷を指し、蝦夷は外地扱いであるが、同時に日本の分内に見る見方も持っている。「林子平は、それまでの蝦夷地を『日本』の外側に位置づけてとらえる見方から、『日本』の内側に組み込んでとらえる見方への移行期、転換点にちょうど位置していて、その水先案内人的役割を担ったのである⁴⁸⁾。

いずれにせよ、ロシア人が千島列島を南下してきたことにより、日本人にも近代的な国境観や領土観が形成されていく。日露の邂逅点が、サハリン島でもカムチャツカ半島でもシベリア大陸でもなく、千島列島であったこと、公的な接触に至っ

ては北海道東端であったことは、日露の領土観、国境観、さらには空間概念の差異を考える時に象徴的である。1552年にイワン雷帝 (Ivan IV, 1530 - 84) が、カザン・ハン国を制圧して東方進出の道を開くと、ロシア人は、90年足らずの間にウラル山脈を越え、シベリアを横断し、1639年にはオホーツク海に出で来た。そこからサハリンに渡り、カムチャツカに進み、1711年には千島列島の踏査を始めている⁴⁹⁾。それに比べ、日本人は、本州から目視できる北海道にも、その北端から見えるサハリンにも、その東端から望見できる距離にある千島列島にも、長い間関心を示さなかった。中野美代子氏は、「津軽から望見できる蝦夷の地が、いったい大陸からのびている半島なのか、それとも独立した島なのか、沿岸をぐるりと航海してみようという気を日本人が起こさなかったのはなぜなのだろうか」⁵⁰⁾と問いかける。

むろん、日本とロシアが置かれていた所与の条件を無視するわけにはゆかないが、ロシア人が首都モスクワやペテルブルグから1万キロを越える道程を100年で制覇し、日本人が目と鼻の先にある島へ数百年間渡ろうとしなかったことは、両者の空間志向性が決定的に異なることを示しているのではなからうか。このような日本人とロシア人の国境意識、領土意識に、差異の生じぬはずはない。古くから、移動することなく居続けたがゆえに、そこが固有領土と意識する日本人と、抵抗する者を征服しつつ、自らの足で制覇してきたがゆえに、そこが領土と意識するロシア人。同時期に近代国民国家の道を歩み始めた日本とロシアであるが、その領土意識は今も大きく食い違っているはずだ。

ロシア人が猛スピードでユーラシア大陸を制覇した陰には、むろん、強力な動機があった。ミハイル・ヴィソコフ (Vysokov, Mihail Stanislavich) 氏は、その経緯を次のように説明する。

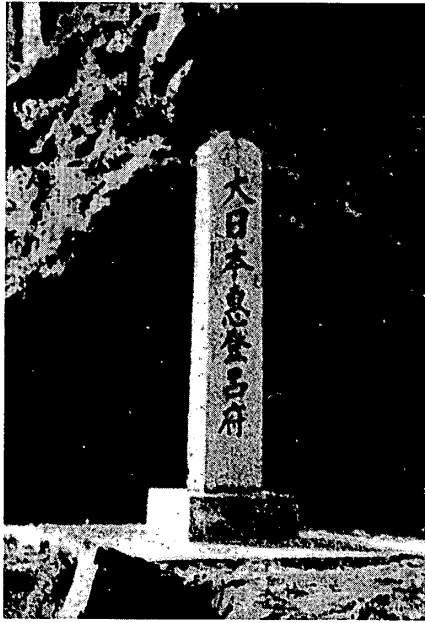
小人数のロシア人部隊は、クロテンが豊富で未征服の土地を求めながら、壮大な距離を制覇した。獵師や商人、兵士や脱走犯が、遠い未知の土地に侵入し、…征服した種族からアマナト (人質) と

ヤサーク (毛皮税) を取りたてた。クロテンを獲り、交易し、河川および海洋船舶を建造し、道路をつくり、偉大な発見をした。貪欲と自由への渴望、自分の国と皇帝に仕えんとする意志が、彼らをいざなった⁵¹⁾。

ロシア人の南下に刺激されて、日本人が千島踏査を始めたのは、1785 (天明5) 年である。工藤平助が、『赤蝦夷風説考』でロシア貿易を勧めたのは、そうしなければ千島アイヌがロシアに靡き、千島列島がロシアの支配下に入るという危惧からである。その助言を受け入れた老中田沼意次は、蝦夷地調査隊を送り込んで、千島の実態調査に乗り出した。翌1785 (天明6) 年、調査隊の竿取 (測量役) 最上徳内 (1754 - 1836) は、和人では初めて択捉、ウルップに渡る。徳内を案内したのは、アッケシの有力アイヌ、イコトイである。メナシ蜂起の際には、妻妾18 - 19人と手下30 - 40人を従えて、択捉、ウルップヘラッコ獵に出かけていたというイコトイは、残忍暴悪の悪党蝦夷と近藤重蔵から手ひどく扱き下ろされているが⁵²⁾、このイコトイや国後のツキノエ、択捉のマウテカアイノ、根室のションコら有力アイヌの仲介を経て、和人の千島踏査やロシアとの接触が進んだのである。

択捉のシャルシャム (シベトロ・薬取) で、徳内はイシュヨ (イジュヨ) らロシア人3人と会い、「赤人」(ロシア)「蝦夷人」(アイヌ)「日本人」の三カ国人が、それぞれの歌や踊りを披露して、懇ろに親しんだと記録している⁵³⁾。ただし、このような三者間の異文化交流の記録は例外で、その後は、日露交渉という二国間関係でのみ千島の歴史が語られるようになり、アイヌはあたかも存在しなかったかのように捨象されていく。

徳内らは、アイヌやロシア人からの情報も得ながら、千島情勢を把握してゆくが、1786 (天明6) 年夏に田沼意次が失脚したため、蝦夷地調査は中止となった。その3年後には、前述したクナシリ・メナシの戦いが起こった。幕府による次の蝦夷地調査隊派遣は1798 (寛政10) 年で、やはり、



図⑩ 「大日本恩登呂府」の標柱（1798年・択捉島－1930年再建）。（北方領土問題対策協会「北方領土返還実現に向けて 北方領土」パンフレット）。

前々年および前年にブロートン率いるイギリスの測量船が東蝦夷（虻田）と箱館・松前沖に現れたことが契機となっている。また、松前藩とロシアとの接触やアイヌへの横暴が幕府にも伝わるところとなり、蝦夷地直轄も視野に入れた調査であった。「北方領土」返還パンフレットに正保御国絵図とペアで必ず掲載される「大日本恩登呂府」の標柱（図⑩）は、この調査で支配勘定近藤重蔵が択捉に渡った際に建てたものである。ロシア人が建てた十字架を倒して建てられたこの標柱は、ロシア人に向けて日本の領土および境界を示そうとした初めての具体的行動であった。標柱の裏には、近藤重蔵、最上徳内、下野源助の他、善助、金平、孝助など12名の名前がある。彼らは、案内船手としてアッケシで雇われたアイヌで、約20名いたが、標柱に記されたのは、重蔵に日本名を与えられた者に限られた⁵⁴⁾。

3. 日本のイッレデンティズモと千島属島論

18世紀末になって初めて択捉とウルップまで足を伸ばした日本人であるが、行ったこともない千島列島に対する領有意識を持っていたことも事実

である。当時の日本人は、千島を日本の属島と主張する論拠を持っていた。まず、1778－79（安永7－8）年に根室、厚岸でシャバーリンと接触した松前藩の使節は、アイヌの居住する場所は、たとえそれがオロシヤの都の近くであっても松前藩の領分だと述べたという⁵⁵⁾。松前藩が交易を行い、支配下に置いていると考えたアイヌが住むところは松前領だというロジックであり、これに従うならば、幕府は千島列島や樺太も間接支配により領有していることになる。本多利明（1743－1820）の影響の強かった最上徳内も、このロジックを用いて、交易圏であるカムチャツカまで日本領だと述べる。さらに、徳内は、千島は地理的に日本国地勢に近いので日本領、その島に住むアイヌは、日本人の一種（日本人種類の蝦夷人）なので日本領という理解を示す⁵⁶⁾。蝦夷地調査隊は、初めて接したアイヌの言語、風俗などに日本人と共通のものを見出し、アイヌも日本人の一種と考えたのである。アイヌも日本人に含まれるので、そのアイヌが住む地は日本とするイッレデンティズモ（Irredentismo未回収地回復運動・同一民族併合主義）は、幕末の日露交渉においても日本側が用いた論拠である。国境画定以前の日本人の千島領有意識・属島論は、次の三点に集約されるだろう。

まず、松前藩の領分である千島は、松前藩が帰属する日本にも間接的に帰属するという間接支配による属島論である。これは、中国の冊封システムが日本に導入されたもので、近世までのアジアにおいては一般的な国際秩序であった。冊封とは、周辺国が中国へ朝貢することにより、中国の国内統治が辺境にまで拡大し、緩やかに抱え込むという秩序である。日本もまた中国へ朝貢した周辺国であったが、同時に小中華として日本の周辺を取込む意志も持つようになった。冊封システムにおいて周辺国に要求されるのは、朝貢や君臣の礼の表明だけであり、その社会構造や文化の差異は問われない。松前藩は、支配意識を持ちながらも、アイヌに和人と同じ社会システムや価値観を要求することはなく、むしろ、和人との接触を制限し、差異化したままに留めようと腐心したのである。

当時のアジアの冊封システムは、琉球王国にも顕著に表れている。琉球は、薩摩藩に帰属すると同時に、清国にも朝貢していた。

しかし、このような副属性、両属性は、近代世界の国際秩序とは相容れぬものであり、西欧列強によるアジアの植民地化や、ロシアや日本が国民国家として台頭するに連れ、アジアの伝統的秩序は崩壊していく。近代国家としての日本に、二義的で曖昧な領土や国民を残す余地はなかった。千島は日本化され、琉球王国も沖縄県にされて、他の日本の地域と同質の日本の領土として中央政府の直接統治に入らねばならなかった。辺境の地の副属性や両属性は、国民国家に生きる現代日本人の領土観にはそぐわぬものであり、日本の「北方領土」返還論からは排除されている。

第二の地理的接近性による千島属島論も、近代の国際秩序の通念からは外れている。世界中の陸地が境界線により分割された現在、自国に近いことを理由に隣接する土地の領有を主張することは、子どもじみた暴論と受け取られるであろう。しかしながら、「こんなに近くにあるのに、なぜ日本のものでないのか」という素朴な感想は、「北方領土」を初めて目にした日本人が必ずといってよいほど口にするフレーズであり、接近性と領有性は、日本人にとっては自然にリンクする概念である。

2002年8月に根室を訪れ、「北方領土」をヘリコプターで視察した川口順子外務大臣は、その直後の返還運動関係者および元島民との懇談会で、「(間近に島を見て)感情レベルで日本のものだと感じた」と語った⁵⁷⁾。外務大臣ですら、国際法や歴史的正義に頼る以前に、あまりの近さに情動的に日本領と感じてしまうのである。その40年前の1967年夏に現地視察した衆参両院の沖縄問題等特別委員会の一行も、「こんなに近いとは思わなかった。これならどうしても返してもらわなくては」と発言したという。中野美代子氏は、これは裏を返せば、遠くになれば放置してもかまわぬという論理を生む、「日本人一般に通じる求心的な、そして近視眼的な発想」だと述べる⁵⁸⁾。「こんな

に近いのに…」という思いは、半世紀の間、晴れた日の納沙布岬に初めて立つ日本人が繰り返し反芻してきた感情である。そして、歴史認識や国際条約・国際法、国際関係の理解とは別の次元で湧き起こる、接近性と領有性の混同は、ロシア人にはおよそ理解し難いものである。

ソ連時代に11カ国との境界を有したソ連人にとり、他国が隣接していることは何の不思議もない。ソ連邦崩壊後のロシアの周囲にも、同じく陸続きでありながら突然境界線が現れる。たとえばバルト海に100キロに渡って伸びる、ユネスコの世界自然遺産に指定されている細長いクルス砂州は、中間がロシアとリトアニアの国境である。幅わずか6キロの砂州の単調な自然を眺めつつ50キロ走ると、そこに検問所があり、手続きを済ませて数メートル移動すれば、そこは異国である。そしてまた同じ砂州が50キロ続く。畑を分断して、通り一本を隔てて、一つの家屋を折半して、国境線が走ることも可能である。

むろん、「近いから北方領土を返還してほしい」とロシア人に言う日本人はいない。しかし、「北方領土」の近さは、折りに触れて日本人に向けて強調される。「現地視察」や「目で見る運動」は、その接近性を日本人に体験させることによって、領土意識を高める効果を狙っている。

第三のイッレデンティズモによる属島論は、日本人とアイヌの人類学的関係や先住民の権利にも関わる問題である。「日本人種類の蝦夷人」なる表現は、蝦夷地が日本の内でもあり外でもあるという領土概念の幅をもってしか捉えられぬ時期があったように、アイヌは、日本人でもあり、日本人でもないような曖昧さを孕んでいる。ただし、このイッレデンティズモは、現在の「北方領土」返還論からは姿を消している。

根室市が、1970年から現在まで30版を重ねて発行している領土返還促進用の冊子『日本の領土北方領土』は、戦前の「北方領土」のあらましや返還運動の推移、安全操業問題等をまとめている。冊子には、齒舞・色丹は北海道の一部との説明の後に、「国後島、択捉島はむかしから日本の領土」

として、その四つの理由が列記されている。その第一の理由は、「国後島、択捉島には歴史上いまだかつて日本人以外の民族（ロシア人を含む）が定住した事実がない」である⁵⁹⁾。

これは、「父祖伝来の地」「私達の祖父母が血と汗で開拓した土地」と対応する、「北方領土」返還要求のテーゼであるが、「1945年まで日本民族以外定住したことがない」は、事実だろうか。わざわざ「ロシア人を含む」と強調してあるが、ロシア人が択捉に居住していたことは、蝦夷地調査隊の最上徳内らが記録するところである。また、「むかしから」住んでいたアイヌ民族はどう理解されるのか。「アイヌは日本民族」とするならば、古代から現在に至るまで、日本人のアイヌ理解は矛盾に満ちたものになる。日本人は、古代の華夷観を引きずる「蝦夷人」、王化されぬ「化外の民」としてアイヌをとらえ、その後「土人」「旧土人」の呼称を、1997年まで使ってきた。アイヌは日本人であり、その居住地を南下するロシア人を日本の侵略者にとらえる一方で、日本人であるはずのアイヌを日本人化したり、強制移住させたりする。また、同化後も日本社会の低位置に固定し、現在に至るまで結婚、就職などで差別を残している。

18世紀末のロシア人の南下は、日本領の侵犯、日本への脅威と意識されるようになり、これを阻止するために、当時の千島における日本の勢力範囲の北限であった択捉の「開業」が急務とされた。1799（寛政11）年、幕府は東蝦夷地を直轄地とし、初代の択捉島係に近藤重蔵と山田鯉兵衛が任命され、翌1800（寛政12）年に択捉「開島」に至る。幕府の運送方であった高田屋嘉兵衛（1769-1827）が国後・択捉の回船ルートを開くと、日本人はアイヌの手を借りずに渡航できるようになる。

すでにウルップ島にロシア人の拠点のあることがわかると、1801（享和元）年に退去勧告のため幕吏が派遣され、「天長地久大日本属島」の標柱が建てられた⁶⁰⁾。「大日本恵登呂府」に続き、ウルップも日本属島とする示威行動であったが、幕府にウルップ「開島」の意志はなく、ロシアとの緩衝地帯として空島にする戦略であった。南千島

アイヌのウルップ渡航禁止によって補給路を断られたロシア人たちは、幕府の思惑どおり、1805（文化2）年に撤退した。

ウルップ渡航禁止は、アイヌ共同体の徹底した分断を意味した。ラッコ島とも呼ばれたウルップは、定住者はいないが、北千島、南千島、道東に住むアイヌがラッコ猟や交易に訪れ、緩やかな千島の共同体の存続に欠かせぬ島であったからだ。北と南の交流は失われ、生業を奪われたアイヌは、漁業への転換を余儀なくされた。さらに、アイヌに対しては、介抱・撫育、改俗・改名が進められた。アイヌに恩恵を与える交易や救恤行為によって直接支配下に取込み、風俗改めや日本名を与えることで、「日本人種類」ではなく「ほんもの」の日本人にしてゆく同化政策であった。すでに、ウルップ・択捉のアイヌやアレウト人が「赤化」していることも知られ、その赤化の拡大は阻止されねばならなかった。

1738-39（文元3-4）年の航海でシュパンベルグが日本北辺への航路を開いた後は、ロシア正教の布教や毛皮猟や日本との交易を目指すロシア人が千島に居住するようになる。18世紀半ばまでに、シュムシュとパラムシルの先住民ほぼ全員が、ロシア正教会の洗礼を受け、シュムシュに開かれた学校でロシア語を学び、ヤサーク（毛皮税）を課されて、ロシア皇帝の臣民に組み入れられていった。

18世紀末まで日本人が足を踏み入れることもなかった択捉は、「開島」以降は、ロシアとの勢力分岐の境目に位置する島として、北海道内部のアイヌよりも急速な同化にさらされた。請負場所での労働力と性の収奪で、すでに弱っていたアイヌ共同体は、地域的一体性を分断され、産業構造を改編され、さらにアイデンティティを破壊された。北千島アイヌは、ロシア語を話し、ロシア名を持つ敬虔なロシア正教徒となり、ロシア風俗になってウォッカを覚え、南千島アイヌは、日本語を話し、日本名を持ち、有力者は乙名・土産取などの役名をもらい、本邦風俗になって日本酒を覚えた。

択捉開島は、第一のトポス解体への新たなメル

クマールである。千島は、内でもない外でもない茫漠とした辺境地帯から緊張した国境地帯へと変容しつつあった。日露の千島踏査や両者の接触に、常に一定の役割を果たしてきたアイヌは、ツキノエ、イコトイ、シヨンコら個性派の有力者を含め、影を潜める。日露の舞台は、長崎、下田、江戸など日本内地に移り、日露のエリート官僚や軍人たちが、ドラマに満ちた交渉を展開する。

第4章 国境線を引く、あるいは列島を切断する

1. 国境線と国境面を引く

1792(寛政4)年のラクスマン来日から今日まで約200年の日露関係を、和田春樹氏は、「交渉の60年、平和の50年、戦争の40年、緊張と対立の40年」と区分する⁶¹⁾。これに従うと日露は、交渉に最も長い年月を費やしたことになる。確かに、択捉「開島」後に、千島列島にウルップを挟んで日口の住み分けが定着してなお、日露条約締結までには半世紀を要した。

第一のトポスが最終的な解体段階を歩んだその半世紀間には、レザノフ使節の長崎来訪、その不首尾から生じた樺太、択捉での番所襲撃事件、また、ゴロヴニン(Golovnin, Vasilii Mikhailovich, 1776-1831) および高田屋嘉兵衛の拉致事件などが起こった⁶²⁾。その後は、時おり露米会社の船が択捉に来航して漂流民を送還し、交易を申し込む以外には特段の事件もなく、比較的平穏な日露の40年が続いた。その後、ペリー(Perry, Matthew Galbraith, 1794-1858)の黒船と時を同じくして1853(嘉永6)年にプチャーチン(Putyatin, Evfimii Vasil'evich, 1804-83)が来航し、一年半に及ぶ波乱に満ちた長崎・下田交渉を経て1855年2月(安政元年12月)の日魯通好条約締結に至る。

日本側の実質的全権である勘定奉行川路聖謨(かわじとしあきら1801-68)とニコライ一世(Nikolai I, 1796-1855)の親書を携えたロシア海軍中将プチャーチンを中心として進められた条約

締結までのドラマは、戦争と対立の多い日露関係史のなかで、ひときわ華やかな一頁を残している。長崎に入港したプチャーチンの一行は、当初は幕府の「ぶらかし」政策に悩まされながら交渉を続けた。「ぶらかし」とは、1804年に長崎に来航したレザノフを激昂させ、今日なお時折、西洋人を憤慨させ、困惑させる、日本人特有の問題解決手段で、イエス・ノーを明言せず、できる限り曖昧なままで先延ばしして、相手があきらめるのを待つという作戦である。そのうえ、英仏の支援を受けたトルコとロシアの間でクリミア戦争(1853-56)が始まり、プチャーチンは、極東の英仏艦隊の動向を気にしながら、日本との交渉を中断して補給、情報収集を行わねばならなかった。さらに、1854(嘉永7)年8月に乗り換えた新造船の旗艦ディヤナ号は、日露交渉も終盤戦に入ろうという同年12月に、停泊中の下田港で安政の大地震による津波に遭い大破した。ディヤナ号は、修理のため戸田に曳航中に沈没し、約500人の乗組員が母船を失って戸田に逗留するなかで、プチャーチンは翌年日露条約をまとめた。

川路聖謨ら日本側も条約締結までには、江戸、長崎、下田を往復しつつ、強硬論の徳川斉昭(1800-60)らの説得にあたり、日々交渉にも苦勞していた。幕府内に依然として根強い攘夷論の中からは、複数の外圧を跳ね除けることは不可能として、むしろ、ロシアと同盟して米国を拒否してはどうかとの反米親露論も出ていた⁶³⁾。確かに、浦賀沖に威圧的に戦艦を送り込み、不平等条約を結ばせた高圧的なアメリカに対し、日本の要請通りに長崎に入港し、交渉においても日本の立場を尊重する姿勢を見せたロシアに、日本人がより好感を持ったとしても不思議ではなからう。ロシアは、クリミア戦争で英仏を敵に回していたため、プチャーチンらはペリーと連絡を取り、アメリカからの物資補給や情報に頼ることもあった。このように、日本開国時の日米口の三者関係は、まだ流動的であった。

日露初の条約の、国境画定に関わる部分は以下の通りである。

今より後日本国と魯西亜国との境「エトロプ」島と「ウルップ」島との間に在るへし「エトロプ」全島は日本に属し「ウルップ」全島夫より北の方「クリル」諸島は魯西亜に属す「カラフト」島に至りては日本国と魯西亜国との間に於て界を分たす是迄仕来の通たるへし⁶⁴⁾

当時の日露の勢力範囲をもとに、千島列島のウルップと択捉の間に国境線が引かれ、勢力分布が明確でなかった樺太（サハリン）は、その所属を確定せずに据え置かれた。「境を分たす」とは、境界を線ではなく面にしたと捉えることも可能であり、「国境面」というユニークな発想である。直接対決を避けるための「緩衝地帯」や、1990年代初めに出てきた日ロによる「北方領土」の「共同統治」案にも繋がるものである。1867（慶応3）年に日露はカラフト島仮規約に調印し、日露両国民の樺太全島における居住の自由を認めて雑居地とした。近代的な国土・領土概念を越えて、一つの島を二国が同時に領有するという画期的な試みであるが、結果は、日本は出稼ぎ漁業者や農工移民を、ロシアは軍人と囚人を送り込んで自国領有の既成事実の形成に腐心し、日本人、ロシア人、アイヌなど先住民の間でトラブルが絶えなかった。結局、樺太境界問題の決着が、日露間の焦眉の課題となったのである。

日露エリート之苦難の末に締結された初の条約の寿命は、わずか20年で尽き、1875（明治8）年の樺太千島交換条約は、樺太をロシア領、千島全島を日本領として、日魯通好条約における領土画定を覆した。しかし、20年で早世したこの条約は、「北方領土」問題において今なお重大な論点を提起することになった。日本が、条文の「『ウルップ』全島夫より北の方「クリル」諸島」を、クリル（千島）諸島はウルップ島以北のみを指し、国後・択捉はクリル（千島）諸島には含まれないことの論拠として使うようになったからだ。ただし、露文の条約においては、「『ウルップ』全島夫より北の方のその他の「クリル」諸島」（весь остров Уруп и прочие Курильские острова к северу）⁶⁵⁾

となっており、日本のような解釈はできない。和文と露文の条約でこのような差異が生じたのは、日露双方に相手側の母語を解する者が一人もいなかったために、交渉が主にオランダ語を通して行われたこと、当時の翻訳の詰めが甘かったことが挙げられるが、よもや100年後に千島（クリル）列島の範囲で日ロがここまで争うことになるとは、当時の交渉者たちは予想できなかったであろう。

日露が平和的に取り決めた千島列島の国境線は、アイヌにとっては、暴力的に共同体を分断する不条理な線ではなかった。すでに択捉「開島」でウルップへの渡航が禁じられていたが、国境画定により列島の南北の交流は完全に不能となった。択捉・ウルップ間の国境線は、その後北へ南へと移動しつつ現在に至るが、その境界線がどこにあるにせよ、アイヌも日本人もロシア人も、決して越えることができなくなった。

幼少から俊敏で水戸藩主として優れた才覚を発揮した徳川斉昭は、徹底した攘夷論者であり、日米和親条約やその後の幕政に反対して、幕政参与も海防参与も辞任してしまうほどであった。開国から150年を経た今日の日本は、彼の意志に反して世界に窓を開いているが、彼の提唱した北門の鎖鑰だけは、軍事侵攻という暴力による以外、その後一度として開かれたことはない。

2. 国境線を引き直す

1875（明治8）年に締結された樺太千島交換条約（サンクトペテルブルグ条約）は、日露双方ですこぶる評判が悪かった。初代在ロシア日本大使になる榎本武揚（1836-1908）とストレモウーホフ・ロシア外務省アジア局長の間で1874（明治7）年から始まった交渉の結果、日本は樺太の領有権を放棄する代わりに、ウルップからシムシユまでの中・北千島を手に入れた。

樺太放棄には日本国内に異論があったが、明治維新後の日本は、北海道の本格的領有と開拓だけでも苦勞しており、さらに樺太まで領有して防衛にあたるのは手に余るとの判断が最終的になされた。ロシア側にも、衝突の絶えぬ樺太を完全に自

国領に組み入れられるのならば、千島列島は放棄して構わないとの判断があった。日露それぞれの国内状況に基づく判断と交渉によって結論された合意であったが、これには日露両国で不満の声が上がった。

我が九州四国の、面積に等しい樺太島を露国に譲り、千島列島のウルップ島以北の小島を得て満足し、樺太千島の交換と称しているは、恰も握り飯と柿の種を交換したるが如き不均衡は三歳の童子でも判っているだろう⁶⁶⁾。

政治・経済上きわめて大きな価値のあるサハリンを、「碁石を並べたような小さな千島」と交換したことに対し、政府を非難するものが少なくなかった。なかには、この交換をもって、日本の領土を日本の領土と取り換えたにすぎないと主張するものすらあった⁶⁷⁾。

…露国の強大を以って北方より頻りに侵略を事とし、我が国力これに抵抗するに堪えず、為に其の疆域を避けて全く樺太島を露国に譲りしなり。世に悲惨なるもの国力の微弱にして強国のために呑噬せらるるより甚だしきはなし…⁶⁸⁾

ロシアにおいてもこの条約は、誤った判断として長らく批判されることになる。

ツァー政府は、広大なクリル諸島の領域を、やはりロシアが争う余地のない権利を持っていた南サハリンのはるかにせまい領域と交換することに同意した。

ロシアの領土のひとつがもう一つのロシア領と取り換えられたのであった。クリル諸島が日本の手に移った結果、ロシアの極東国境に対する脅威が作り出され、ロシア船の太平洋への便利な出口が閉ざされてしまった⁶⁹⁾。

日魯通好条約と同じく、平和的な話し合いによって決着した1875 (明治8) 年の領土画定は、

日本人にもロシア人にも、自国の不当な譲歩という、現実とは異なる誤った認識を与えた。しかも、両者の誤解は、奇妙なシンメトリーを成している。

日本人には、猿蟹合戦で愚かな猿がつかまされた柿の種か碁石にしか見えぬ、中・北千島は、ロシア人には、ツァーリ (皇帝) の有する神聖かつ広大な土地に見えた。日本人がロシアの樺太領有を侵略とみなした時、ロシア人は、日本の千島全島領有によって、オホーツク海に封じ込められたとの危機意識を持った。同じ条約において、片方が喪失したならば、もう片方は獲得しているはずなのに、日本人もロシア人も不当に領土を失い、その結果、国防が危機に曝されたと考えたのである。特に、自分の領土を自分の領土と取り換えたとの錯覚が双方に生じた点は、注目されるべきであろう。日魯通好条約およびカラフト島仮規約によって、日本は択捉以南の、ロシアはウルップ以北の千島列島を領有し、樺太の領有権は双方が二分の一ずつ有していた。日本が樺太の二分の一を放棄してウルップ以北の千島列島を得たのに対し、ロシアはウルップ以北を放棄して、樺太のさらに二分の一を得て一となし、樺太全島を領有した。ウルップ以北の千島列島と樺太の二分の一が、交換されたのである。これが等価交換であったか否かは別として、自分の持ち物を取り換えたのではないことは明らかである。

このような誤解は、日露双方に日本北辺地域に関する領土観に混乱があったと同時に、領土意識、境界意識は、短期間でいかようにも変化することを示している。日露双方の大多数の国民にとって、その存在も地理も不明瞭なままに無関心であった土地が、国境線の引き直しによって、突然かけがえのない「領土」としてクローズアップされたのである。

樺太千島交換条約は日本人の義憤を駆り立て、憤懣やる方なき若き二葉亭四迷 (1864-1909) は、日本の将来の憂いはロシアであるとして、東京外国語学校でロシア語を学び始めた。また、病身を押し立て1890年にサハリンを訪れたチェーホフ (Chekhov, Anton Pavlovich, 1860-1904) は、

そのルポルタージュ『サハリン島』で次のように述べている。

…われわれは気前がいいために、遣らなくてもいいものを遣ってしまったらしい。…「相手の顔を立てる」だけなら、千島列島のうちでも日本に最も近接したところを5、6島遣るだけでよかったのに、われわれは22島も与えてしまひ…⁷⁰⁾

樺太千島交換条約は、締結と同じ1875(明治8)年8月に批准され、日露の国境線は、宗谷海峡(サハリンと北海道の間)とペルヴイ・クリルスキー海峡(カムチャツカ半島とシムシユ島の間)に確定した。この決定に従い、日本は中・北千島を千島国に編入し、後には色丹も千島国にして、第二次世界大戦終結時まで日本内地として扱った。ところが、現在日本が固有領土として執着を見せるのは、択捉以南だけである。一方ロシア(ソ連)は、サハリン領有のために捨ててしまった中・北千島に1945(昭和20)年に侵攻し、さらにそれまで一度として領有したこともない択捉から歯舞まで占領して今日に至っている。

フランス語を正文とする樺太千島交換条約の和文と露文には、かなりの違いがある。和文には、「…現今所領「クリル」群島即ち第一「シムシユ」島…第十八「ウルップ」島共計十八島ノ権利及び君主ニ属スル一切ノ権限ヲ大日本国皇帝陛下ニ譲リ…」⁷¹⁾とあり、クリル群島(千島列島)は、第一島のシムシユから第十八島のウルップまでであり、択捉以南は含まれないとの解釈が可能である。一方露文は「…今後、クリル群島の上記グループは、日本国皇帝に帰属する。このグループに含まれるのは、下記の十八島である。即ち…」(…отныне сказанная группа Курильских островов будет принадлежать Японской Империи. Это группа включает в себе нижеозначенные восемнадцать островов, а именно …)⁷²⁾となっており、十八島は、クリル群島(千島列島)の一部を成すグループという意味にしか解釈できない。日露通好条約第二条と同じ齟齬が、和文と露

文から生じている。当時作成された、仏文も《le groupe des îles dites Kouriles》となっており、十八島は、千島列島のなかのグループと解釈される⁷³⁾。当時の、不正確な翻訳と日露間での詰め甘さが今日まで尾を引いている。

3. エスニック・クレンジング(民族浄化)としての強制移住

ビザ無し渡航で色丹島を訪れる日本訪問団は、日程の最後に必ず日本人墓地を訪れて献花する。17の粗末な礎石・墓石のうち4基には、「神僕ストロゾフィヤコフ酋長墓」「神僕イサイヤ関藤右衛門之墓」など聞きなれぬ名前が刻まれている。墓石の上には、十字に斜めの横軸がもう一本入ったロシア正教会独特の十字架が描かれている。言語は日本語、宗教はロシア正教、これらの墓石は、日露の二重支配のもとで北千島アイヌが辿った滅びの道程を象徴するかのようである⁷⁴⁾。

日露通好条約から20年後に引き直された国境線は、北千島アイヌや樺太アイヌの強制移住を伴う、第一のトポス消滅の最後のメルクマールとなった。この後のアイヌ民族は、ひたすら減少を続け、生き残った者も和人との混血や同化で日本人社会の底辺へと溶解してしまう。

千島列島の国境線が北上したことで、日本にとっての国境の島は択捉からシムシユに変わった。南部のアイヌが入り会い地としてのウルップへ渡航を禁じられ、中・北千島との有機的繋がりを断たれたのと同様の事態が、北千島とカムチャツカ半島の間で起きた。カムチャダール(イテリメン)と交流していた北千島アイヌは、中・北千島がロシア領に確定してからは、いっそうロシア化が進み、カムチャツカとの結びつきが深まっていた。樺太千島交換条約に基づき日露間で北千島授受の手続きが済むと、北千島アイヌは、生活圏を横断して引かれた境界線のどちら側か一方を居住地にするという、難しい選択の前に立たされた。ラッコ猟のためにカムチャツカから連れてこられて、ウルップ島とシンシリ島に居住していたアレウト人約100人は、ラッコが減少していたことも

あり、全員がロシア領へ移った。三年後、北千島アイヌは悩んだ末に、「漁獵及鳥獸其他百般ノ職業ヲ営ム従前之通りタルベシ」⁷⁵⁾との条件から、自分達の生業の地である北千島を選んだ。

それまで和人がほとんど行ったこともなかった中・北千島の本格的経営に日本が乗り出すのは、昭和に入ってからのものであり、根室から1200キロ離れた遠隔の島々の統治は、明治政府にとっては厄介な問題であった。物資輸送に経費がかかるうえ、北千島アイヌは、千島南部のアイヌと異なり、ロシア正教に帰依し、ロシア語を話し、しかも島々を自由に移動する生活をしてきた。国境画定後も、弾薬等の調達にはロシア領に越境していたという⁷⁶⁾。幕府が、択捉や国後のアイヌに対して行った介抱、撫育、改役、改名では済まされぬ状況であった。

明治政府の取った解決方法は、約100名の北千島アイヌを色丹島へ移住させ、日本最北端でロシアと対峙する北千島を空島にすることであった。国境意識が北上したことによる、自然の帰結であろう。アイヌの居住により千島属島論の正当性を主張した日本のイッレデンティズモと矛盾し、また、アイヌに対する「百般ノ職業ヲ営ム従前之通りタルベシ」の約束を反故にするものであった。1884(明治17)年7月、シムシユ、パラムシルの北千島アイヌ97人は、逡巡の末、明治政府が派遣した根室県役人らの説得に応じて、色丹へ向かう船に乗りこんだ。飼っていた犬を殺し、未練を残さぬためか、住居は焼き払っての出航であった。同月、択捉で下船した4人を除き、94人の北千島アイヌが色丹に上陸した。上述の墓石は、彼(女)らの末裔のものである。

北千島アイヌは最後まで移住を渋っていたが、役人の説得は拒否できぬもので、結局は強制移住にほかならなかった。現代用語を使うならば、エスニック・クレンジング(民族浄化)である。北千島アイヌの前に、すでに同じような事例が見られる。1807(文化4)年、色丹で漁業に携わっていたアイヌ100-120人が、花咲(根室市花咲港)に移住させられた。当時、色丹居住のアイヌはす

べて番屋の管理下にあり、数年続いた不漁や交通の便の悪さから移住が決まったというが、同年には、フヴォストフ・ダヴィドフが択捉で番所襲撃事件を起こしており、ロシアに対する危機感と関連した措置であったかもしれない。花咲に移住したアイヌたちは、そこで1843(天保14)年の大地震に遭い、さらに翌年、穂香(ホニライ)に移っている⁷⁷⁾。こうして、「此土人ヲシテ花咲ニ移住セシメタルニヨリ、空島タルコト久シ」⁷⁸⁾ かった色丹に、ほぼ80年ぶりに北千島アイヌが送り込まれたのである。

入植した94人の北千島アイヌは、新しい土地にまったく適応できずに、移住の翌年1885(明治18)年に79人に減り、5年半後にはほぼ半数が死亡してしまった。移住は、不作為であったにせよ、短期間で北千島アイヌを絶滅に至らしめ、エスニック・クレンジングの呼び名に相応しいものであった。明治政府は、色丹島の新しい住民を放置したわけではなく、根室県役人、医師、通訳を置き、十年間で農業、漁業、牧畜業を北千島アイヌの新たな生業として定着させようと、一定の予算をあてて奨励した。しかし、北千島と異なる色丹の気候や食生活など環境の激変による脚気病などの罹患、島々を自由に渡る生活から農業を主体とする定住を強いられたこと、カムチャツカなどとの交流を失い孤立した生活に陥ったストレスによって、移住者たちは、生きることへの執着そのものを喪失したかのようであった。

帰還を望む北千島アイヌの嘆願は明治政府に受け入れられなかったが、移住後13年を経た1897(明治30)年から、北千島へ出稼ぎ猟に出ることが許されるようになる。この出稼ぎは、当初は好調であったが、次第にラッコもアザラシも獲れぬようになり、1909(明治42)年に中止となった。

なお、樺太千島交換条約によって新たに引かれた宗谷海峡の国境線は、樺太アイヌにも北千島アイヌ同様の運命をもたらした。1875(明治8)年に841人の樺太アイヌが、宗谷を経てへ石狩地方の対雁(ついしかり)に強制移住させられたが、適応できず、天然痘などの流行もあり移住者の半

数近くが死亡した。日露戦争後の1905（明治38）年に南樺太が日本領となると、生存者のほとんどが樺太に引き揚げた⁷⁹⁾。

4. 第一のトボス消滅の相貌

かつては、自然環境に適応した生活形態を築き、北の海の交易者として広範な物流を可能にし、日露接触の橋渡しをしてきたアイヌたちは、急速にその共同体を解体され、19世紀後半になると、変わり果てた哀れで惨めな姿ばかりが記録されている。アイヌ民族の凋落の記録者たちは、一様にその消滅を予測し、その予測通りに千島アイヌは消滅した。

千島海域で20年にわたりラッコやオットセイ猟に携わった英国人の密漁の王者、スノー（G.J.Snow, ?-?）は、1874（明治7）年の択捉のアイヌについてこう語る。

今日、アイヌは、世界中で最も従順で無気力な人間である。アイヌの男を殴ってみればただ泣き出すだけである。…彼らは勇気と臆病の奇妙な混合であり、熊を襲うのは躊躇しないが、日本人に対しては致命的で本能的な恐怖を持っている。

1889（明治22）年に色丹のアナマ湾に停泊していたスノーの船を、北千島アイヌの一人が訪ねて、「彼らの深い悲しみと、みんながどんなに昔の家に戻ることを望んでいるかを訴え」という。スノーの記録では、1891（明治24）年、色丹の北千島アイヌは、「男女児童あわせて59人にすぎなかった」⁸⁰⁾

1898（明治31）年、北海道および千島をニコライ主教（Nikolai, 1836-1912）とともに巡回したハリストス正教会のセルギー掌院（Sergii, Stragorodskii, 1867-1944）は、根室から色丹に渡り、北千島でロシア領から分断されて24年、色丹移住から14年を経てなお、アイヌが熱い信仰を維持し続けていることに深い感銘を受けている。北千島アイヌは、約20年間、司祭がいない

なかで、正確に教義を守りつつ自分たちで洗礼や埋葬を行っていた。しかし、色丹での生活はその滅亡を予見させるものである。

色丹島で彼らは死に絶え始めた。…今は全部で62人しかおらず、彼らの非常に多くが結核にかかっているし、障害者も何人かいる。…ほとんど全員が日本語を話し、子供たちは、日本語のほかには、別の言葉は何も知らない。

セルギー掌院は、北千島アイヌの「唯一の救いは、本当の日本人になって、この主要民族と同化することである。さもないと、村は絶滅に瀕することになる」と結論する⁸¹⁾。

翌1899（明治32）年、人類学者の鳥居龍三（1870-1953）が、色丹に約1ヶ月滞在して北千島アイヌの詳細な調査を行った。

最初色丹島に來りし97名の土人は、其中63名己に死したり。現今色丹にある土人の総数62名は、最初の63名の死者を除きたる人員に、色丹にて生まれたる32名を加へたるものなりとす。

…明治17年以来今日まで僅かに15年なるに死者を出したること実に以上の如し。

「古来波風荒き千島列島に、水草を追ひて、移住往来し」た、「剽悍勇猛なる」千島アイヌであったが、「この形勢を以て進み行かば、汝の運命將に知るべきのみ」⁸²⁾ という状況である。

スウェーデン人の探検家ベルグマンが1930（昭和5）年に訪れた千島は、すでに第二のトボス、すなわち日本人の島に変容している。第一のトボスは、微かに過去の痕跡を見せるに過ぎない。

国後と択捉の両島の住民は主として日本人である。しかし日本人と血をまじえたアイヌもいくらかすんでいた。…今でも国後と択捉のアイヌの子孫と北海道のアイヌの間には往来がある。冬の猟期になると北海道アイヌのいく人かは、この二つの島へ猟に渡ってくる。

まだ獵を忘れていないアイヌの末裔たちの姿が、わずかばかり認められる。ウルップ島に四年間滞在して多数のキツネ、クロテン、ワシを獲り、クマも倒すという沢口という名のアイヌ獵師について、ベルグマンは書いている。無人島に移住させられたために、他の島のアイヌよりも同化が遅れた色丹のアイヌたちも、昭和期には風前の灯火である。

アイヌ村はまだあったけれども、それはとてもわびしい姿をしていた。彼らはすでのほかの住民と血をまじえ、日本の民族にうつりつつあった。…床には畳をしき、…食物は主に米で、仕事は夏にはノリをとって本州へ売りに出していた。…彼らのこどもは日本のこどもと同じく日本の学校に通い、いつもおたがいに日本のことばを話している。私はまだロシア語をおぼえている年とった女に二、三人出会っただけである。…

彼らの目にはいつもうっとうしい陰気なかげがうかび、今でははかなくなっただけで北のほうの島へのあこがれをあらわしている。その声もまたしめりがちで、彼らの子孫がまったく絶えてしまうのがただ時の問題にあることをしめしている。⁸³⁾

1933 (昭和8) 年の色丹の北千島アイヌは、14戸、41人 (男14、女27) で、14戸のうち11戸の戸主が女性である。その理由は、「和人の漁夫らが内縁関係を結んで入婿したものである。したがって子女は多くは混血児であって、純潔の千島アイヌと認められるものは数名にすぎない。男の人口の少ないのは、同族が放浪性であって、北千島やカムチャツカ方面へ出稼ぎ、その地で病死または不慮の災害に遭うなどのことが原因である」⁸⁴⁾と説明されている。江戸時代の請負商人による場所と同様に、昭和期もなお和人男性によるアイヌ女性の性の収奪は続いていた。そして、半世紀前に島々を自由に往来する生活形態が奪われたことは忘却され、アイヌ男性が色丹に居着かぬのは、

「放浪性」のためと理解されている。

色丹元島民で、戦後引き揚げた日本人のなかには、まだ当時のアイヌの様子をおぼえている人もいる。1930年代に色丹で子ども時代を過ごした元島民は、「アイヌ、アイヌと言っていじめたり、喧嘩をししたりした。アイヌの男たちは、金をもらおうとすぐに酒を飲んで使ってしまう、結局、和人の使役のような仕事しかできなかった」と話す⁸⁵⁾。

日本政府は、困窮するアイヌに対して様々な救済措置を取るが、その中の一つは、和人と同様の教育を与えることであった。困窮はアイヌの無知によるものと判断され、教育が彼(女)らを救う最善の道と考えられた。しかし、和人の生活形態に順応できぬように、アイヌの多くは、和人の教育方法にも馴染めなかった。アイヌは、日本社会の底辺で保護すべき対象となり、1900 (明治33) 年に「北海道旧土人保護法」が採択された。土地所有の觀念の欠如から生活圏の多くを官有地にされ、かつての生業も奪われ、日本語を話し、米食するようになった同化後のアイヌは、「日本人」ではなく「旧土人」である。旧土人保護法は、1997年のアイヌ新法に替わるまで、約一世紀の間存続した。

色丹のアイヌに対しては、移住の年から日本人教員が配され、アイヌの子どもたちは日本語と算術を学んだ。翌年には、その児童から選抜された8人が、日本語と学芸習得のために家族を離れ根室に送られている。「不幸にしてこのうち2人は病に罹り同地に於て死亡したが、残餘の6人は無事帰島した」⁸⁶⁾という。北千島から色丹への移動は、大人にとっても適応が困難であったくらいであるから、さらに北海道に送られたこどもたちが死に至ったとしても不思議ではなからう。

第一のトボスの消滅は、どの時点に見るべきであろうか。中・北千島では、強制移住によるエスニック・クレンジングが終結した1884 (明治17) 年であろう。しかし、千島南部のアイヌは次第に同化していったため、その終焉を特定するのは難しい。択捉・国後のアイヌ人口に関して次のよう

な記録がある。

択捉	1800年	1,118人	国後	1809年	555人
	1841年	608人		1822年	347人
	1856年	498人		1854年	99人
	1873年	378人		1869年	69人 ⁸⁷⁾

1875年 択捉・国後合わせて 約800人⁸⁸⁾

アイヌ人口の減少は、千島だけでなく、蝦夷地(北海道)・樺太全体に顕著であった。1807(文化4)年に約26,400人を数えたアイヌ民族は、1822(文政5)年に24,300人に、1854(安政元)年には18,400人になり、約半世紀で3割が減少している⁸⁹⁾。昭和期には、千島に居住するアイヌは激減していたであろう。

ステファン氏は、1945(昭和20)年のソ連軍の侵攻時に、千島に残っていたアイヌは3人としている。同氏によれば、パラムシルに一人、択捉に二人で、この二人はアイヌであることを否定したという⁹⁰⁾。アイヌとしてのアイデンティティーを有していても、あえて出自を語ろうとしなかったとしても不思議ではない。「旧土人」であることを、自ら表明しても何ら利益はなかったであろう。樺太アイヌの強制移住の地である対雁に、1890(明治23)年に犠牲者を忍ぶ碑が建てられたが、訪れる人は少ないという。

縁りの者だと申し出る人も限られており、中にはそうしたことには触れないでほしいという方も多い。

アイヌであるということを知られても、決して良いことは無かったという、過去の長い間の積み重ねがそこにあるのであろう⁹¹⁾。

1946-1947(昭和21-22)年にかけて、ソ連による千島の日本人居住民の強制追放とともに、第一のトポスのわずかな生存者も千島を去った。共同体としての機能は、それよりもかなり早い時期に失われていたことが推測される。

むすびにかえて

- 第一のトポス復権の可能性 -

「北方領土」から捨象された千島は、「千島列島」、「千島国」が示すとおり、地理的名称、行政区の名称として使われてきた日本固有の名称である。平安時代の「蝦夷ガ千島」から700年かけて、東漸、収縮して定着した。「北方領土」という名称も、東北アジアの広範な地域から樺太・千島、そして最終的に国後・択捉・色丹・歯舞諸島へと東漸、収縮した。違いは、前者が数百年かけた自然な流れであったのに対し、後者は、国家判断を含む半世紀足らずの急速な流れであったことだ。

千島列島上の第一のトポスは、日露という近代国家の挟撃によって消滅するが、先住民たちは、日露の正式交渉が始まる前から、情報収集、交易、非公式接触を媒介する一定の役割を果たしていた。千島が日本の内でもあり外でもあり、アイヌが日本に帰属しているとも、いないともいえる曖昧な時代がそこにあった。

しかし、ロシアの南下は、日本北辺の領土意識を鋭敏にし、日露国境画定に至って曖昧さは一掃される。千島列島は国境線で分断され、先住民も日露どちらかへの帰属を明確にせざるを得なくなった。国境付近に居住するアイヌに対しては、同化政策の強化や強制移住が実行された。テッサ・モーリス=鈴木氏は、日本とロシアの先住民に対する政策が、大きく異なったにもかかわらず、「国境線のそれぞれの側に居住する先住民族が実際に経験したことの内実はしばしば驚くほど類似していた」と述べ、先住民の共同体を横断して引かれた国境線付近の先住民が、1930年代の極東においてソ連国家により潜在的なスパイ、裏切り者とみなされたこと、それにより悲劇的な結末がもたらされたことを指摘する⁹²⁾。

民族的に「純粋」な地域を確保するための少数派排除の抑圧的手段として用いられるエスニック・クレンジングは、第一のトポスだけでなく、第二、第三のトポスでも見られる。それは、千島

列島上で境界線が振動するか、振動すると予測される度に繰り返されて、その振幅内の住民は、否応なく退去させられる。明治政府が北千島アイヌを色丹島に強制移住させた1884（明治17）年から約60年後の1947（昭和22）年、千島列島および歯舞諸島に居住していた日本人約1万7千人すべてがソ連政府によって追放された。また、第二次世界大戦後のソ連軍侵攻の後に、ソ連のクリル植民政策によって送り込まれたソ連人が、自国政府によって強制移住させられている。1956（昭和31）年に日ソ共同宣言で平和条約締結後の色丹・歯舞の日本への引き渡しが決まると、ソ連政府は、歯舞諸島に入植していたソ連人すべてを国後島に移住させたのである。そのため、かつて5千人を越える日本人が居住していた歯舞諸島は、今日なお無人島である。

千島列島の第二のトポス、日本人社会のディアスポラは、北海道根室を中心に存在し、当事者としての「北方領土」返還運動を担っている。「北方領土」返還運動の創始者は、終戦当時に根室町長であった安藤石典（1886-1955）とされ、彼が1945（昭和20）年12月に連合軍総司令官マッカーサー（Douglas MacArthur, 1880-1964）元帥に「北海道付属島嶼復帰懇請陳情書」を提出して、「南千島及ゴヨマイ諸島」を米軍の保証占領下に置くよう懇請したことが、返還運動の第一歩とされる。色丹島に牧場を所有するなど、千島との関係が深かった安藤は、歯舞諸島をゴヨマイ諸島、択捉、国後、色丹を南千島と呼んでいる。日本領有の根拠として、陳情書は、南千島・ゴヨマイが、根室とは「産業、経済、人情、風俗等全く同一でありまして親子の関係」にあること、「日本の封建時代より日本国土でありまして住民は父子相伝へて三代乃至五代も相続して」いることを挙げている⁹³⁾。

一世代を20年として計算するならば、「三代乃至五代も相続」したということは、60年から100年間相続してきた、終戦時から遡るならば、1845（弘化2）-1885（明治18）年の間に先祖が島に入り始めたということになる。日露通好条約と樺

太千島交換条約締結を含むこの40年間は、先住民が激減して第一のトポスが消滅すると共に、新たに入植した和人による第二のトポスが形成された時期である。終戦直後の安藤の陳情書において、すでにアイヌの存在は忘却されており、根室と島の人情・風俗も同一となっている。

北千島アイヌの「民族集団としての滅びの道程」を詳細に辿った小坂洋右氏は、その微かなディアスポラをつきとめている。「シムシム島でコサクに猟犬の引き換えに売られた」との伝承を持つ北千島アイヌの末裔が、今なお、ポーランドに居住しているという。末裔の姓は「クリリチク」で、クリル列島を想起させるものである。また、アムール川河口から約200キロ上ったブラーヴァ村で、3代前に北海道から逃げてきたアイヌ民族の末裔を取材している⁹⁴⁾。

また、最後の純粋な北千島アイヌと特定される女性は、1972（昭和47）年に根室の病院で亡くなっている。1894（明治27）年に色丹で生まれた田中キヌ氏は、戦後、色丹から追放された後は、根室管内中標津町上武佐のハリストス正教会に身を寄せていた⁹⁵⁾。

戦後の一時期、ソ連に対する領土返還要求にアイヌを利用する動きがあった。サンフランシスコ平和条約締結後の1953（昭和28）年、「歯舞諸島復帰懇請根室地区国民大会」に続き、東京でも全国的行事の開催が予定されているとの記事が、7月16日付け北海道新聞に掲載された。このなかで、根室の引揚者代表が、「千島が、日本のどん欲によって奪い取ったものではなく幾代にもわたって築き上げてきた郷土であるという生証人として…元クリル族の酋長現中標津町上武佐、行商寿山仁作さん（50）」を東京に同行するとある。「寿山さんはウルップ以北の諸島に定住していた現地民クリル族酋長の子孫だが、いまは故郷を失い一族はバラバラ」で、当人は、「近いうちに一族一同もう一度上京して東京のニコライ堂で祖先の祭をやりたい」と述べている⁹⁶⁾。上武佐在住ということは、田中キヌ氏同様にハリストス正教会と繋がっているのであろうか、この時点でなお北千島ア

イヌの末裔は、信仰を拠り所としたアイデンティティーを保っていたことがわかる。

その後、「北方領土」返還運動にアイヌ民族の主張の場が設けられることはなくなった。高倉新一郎氏は、1969年に発表した「アイヌ政策史」を次のように締めくくっている。

…北海道開拓政策、それに伴うアイヌ政策は、人種として、もしくは民族としてのアイヌをまったく和人の中に解消してしまったのである。

…アイヌ問題は、もはや人種、民族の問題としてではなく、むしろ社会経済的な偏境に住むが故の貧困の問題としてとらえねばならない時期にきている⁹⁷⁾。

民族が消滅すれば、おのずと民族問題も消滅するという、究極のエスニック・クレンジングの完遂である。しかし、アイヌは和人の中に解消されたといえるだろうか。

2002年8月に川口順子外務大臣が納沙布岬を視察した際に、「返せ日本に北方領土 先住民族アイヌ」とのプラカードが掲げられた⁹⁸⁾。これは個人の意志による行動であったが、1991（平成3）年に結成された「アイヌ・モシリの自治区を取り戻す会」は、「(日ロ) 両国の一方的利害に翻弄されてきた私たちの祖先は、…北方諸島への自由往来も厳しく制限されてきた」とし、「アイヌ民族の領土である北方の全島々の領有権を主張している⁹⁹⁾。また、2002年8月には、北海道ウタリ協会が、「北方領土」の先住権を主張していく方針を決めた¹⁰⁰⁾。千島アイヌの末裔は、和人の中に溶解したわけではなく、むしろ、北海道や樺太にも居住したアイヌ民族に包摂されるかたちで、その復権を主張し始めているといえる。

日本外務省は、「北方領土」の先住権主張に対し、「アイヌ民族も国民の一部として返還交渉を行っており、交渉に影響はない¹⁰¹⁾」としている。しかし、国際連合が定めた「世界の先住民の国際年」1994（平成6）年に先立ち、1992（平成4）年12月の国連総会で演説に立った野村義一

(1914-) 北海道ウタリ協会理事長は、「日本のような同化主義の強い産業社会に暮らす先住民族として、アイヌ民族は、様々な民族根絶政策（エスノサイド）に対して、国連が先住民族の権利を保障する国際基準を早急に設定するよう要請いたします」と訴えている¹⁰²⁾。日本とロシア、二つの近代国家の挾撃に遭って消滅していった千島アイヌの継承者たちは、今や近代国家の在り方そのものに異議を申し立て、近代の超克につながる論理を、日ロ二カ国を越えて国連の場を利用して提示しようとしている。アイヌ民族というアイデンティティーに包摂されての第一のトポスの復活は、思いもかけぬ国際性をおびて、「北方領土」問題を日ロ国境画定とは別の位相の問題に持ち込む可能性を持っているのではないだろうか。

註

- 1) 菊池勇夫『エトロフ島 つくられた国境』吉川弘文館、1999年、2頁。
- 2) 1962年3月9日第40回国会衆議院本会議「日本固有の北方領土回復に関する決議」、同年3月14日に参議院本会議も同決議を採択。
- 3) 1964年6月17日「国後、択捉両島の名称についての日本外務省事務次官の通達」。「…国後、択捉両島を指すものとして南千島という用語が使用されている場合が散見される」が、これは、両島が日本がサンフランシスコ条約で放棄した千島列島の「一部であるがごとき印象を与え、無用の誤解を招くおそれがあり、北方領土問題に関するわが方の立場上好ましくない」とされた。（国際地域資料センター編集『日本の領土と日ソ関係』、1986年、478頁）。
- 4) 千島通史と呼べるものは極端に少なく、次の三点がすべてであろう。①高倉新一郎『千島概史』南方同胞援護会、1960年。②John J. Stephan “The Kuril Islands Russo-Japanese Frontier in the Pacific”, Clarendon Press, Oxford, 1974. ③川上淳「千島通史」(1) (2) (3)、根室市博物館開設準備室『根室市博物館開設準備室紀要』第15、16、17号、2001、2002、2003年。

- 5) アイヌに関する研究は多数あるが、千島アイヌのみを扱ったものは限られている。①鳥居龍蔵『千島アイヌ』吉川弘文館、1903年。②根室シンポジウム実行委員会編『三十七本のイナウ』北海道出版企画センター、1990年。③北海道・東北史研究会編『メナシの世界』北海道出版企画センター、1996年。
- 6) 日露通好条約 (1855年) および樺太千島交換条約 (1875年) でそれぞれ日露国境に近接することになった択捉島およびシムシユ島の先住民に焦点を当てた次の二点がある。①菊池、前掲書。②小坂洋右『流亡 日露に追われた北千島アイヌ』道新選書、1992年。
- 7) 夫木和歌抄より西行 (1180-90) 作。(児島恭子『『えぞが住む』地の東漸-メナシとは何か』、北海道・東北史研究会編『メナシの世界』北海道出版企画センター、1996年、130頁)。
- 8) 同上、132頁。
- 9) 『吾妻鏡』。(榎本守恵『北海道の歴史』北海道新聞社、1981年、51頁)。
- 10) 北方領土問題対策協会「北方領土返還実現に向けて 北方領土」パンフレット。
- 11) 秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学図書刊行会、1999年、18-19頁。
- 12) 同上、4、5、16-17、207頁。
- 13) 同上、399、401頁。
- 14) ラ・ペルーズ海峡 (宗谷海峡)、プロートン島、間宮海峡 (タートル海峡) など。
- 15) 《Атлас Сахалинской области Часть II Курильские Острова》, 1994.
- 16) 下斗米伸夫『北方領土Q&A80』小学館文庫、2000年、24-25頁。
- 17) 本稿で用いる「千島」「千島列島」は、地理学上の千島列島、つまりシムシユ島から国後島までを指すものとする。「南千島」は、色丹を含む場合と含まない場合があるので、混乱を避けるため原則として使用しない。
- 18) 北方領土が国際的にどの程度理解を得ているのかという国会質問を契機に、1981年に、日本外務省がサンフランシスコ条約締結国48カ国の地図を取り寄せて調べたところ、大半がソ連領として記載していることがわかった。そこで、超党派での国連外交などで、海外の地図の「誤記訂正」が積極的に展開された。毎日新聞1981年8月14日、1983年9月4日。(戸丸広安監修『新聞集成 北方領土』下巻、大空社、1993年、28、57頁に再録)。
- 19) 《Большой Энциклопедический Словарь》, Научное издательство《Большая Российская Энциклопедия》, 《Норинт》, 1997, стр. 611.
- 20) 「kur」はアイヌ語で「人」を意味する。カムチャダールがアイヌを指して使っていた「kushin」, 「kuzhin」をコサックが「kuril」と変形させたことが「クリル」の由来とされる。(村山七郎『クリル諸島の文献学的研究』三一書房、1987年、18-19、33頁)。
- 21) 根室市役所企画振興部北方領土対策室領土対策係『日本の領土 北方領土』根室市、2001年、120頁。
- 22) 川上、「千島通史 (1) 考古学から見た先史時代」、根室市博物館開設準備室『根室市博物館開設準備室紀要』第15号、2001年3月、71-79頁。
- 23) 川上、「千島通史 (2) 千島の発見」、根室市博物館開設準備室『根室市博物館開設準備室紀要』第16号、2002年3月、89頁。
- 24) 「我が国国民の北方領土への訪問について」1999年9月10日閣議了解。(外務省国内広報課『われらの北方領土2003年版 資料編』)。
- 25) Stephan, 《The Kuril Islands》, p.21.
- 26) Ibid., p. 27.
- 27) 有限会社通訳センター『ロシア語通訳者のための北方領土・四島交流ハンドブック』1999年、33頁。「領土問題に関する双方の立場の表現集」の項目には、外務省等が刊行している公的な「北方領土」返還促進パンフレットなどから選んだ約50の典型的な表現が、日本語とロシア語で列記されている。
- 28) チュプカは「日の昇るところ」、クルミセは「唾人」を意味し、カムチャダールやアレウトの話す言葉が理解できぬところからアイヌが名づけたと言われる。(Stephan, 《The Kuril Islands》, pp.6-7.)
- 29) 北構保男「オホーツク文化研究の過去・現代・未来抄」、北海道・東北史研究会編『メナシの世界』北海道出版企画センター、1996年、18頁。
- 30) 高倉新一郎『千島概史』南方同胞援護会、1960年、

- 17頁。
- 31) 北海道・千島・樺太南部に居住していたアイヌ民族が接してきた主な民族は、和人、満州族、ロシア人、ウイльта人、ギリヤーク人、カムチャダール人、アリュート人で、この七つの異民族との接触が六つの交易関係、満州交易、山丹交易、ウイльта交易、ロシア交易、カムチャダール・アレウト交易、和人交易を生んで、広範な地域の物流を起こしたことが知られている。(上村英明『北の海の交易者たち アイヌ民族の社会経済史』同文館、1990年、9-10、21-22頁)。
- 32) 菊池勇夫『アイヌ民族と日本人 東アジアの中の蝦夷地』朝日選書、1994年、14-15頁。
- 33) 1834(天保5)年、熱心な攘夷論者であった水戸藩主徳川斉昭が、日本北辺の国防の重要性を説き、蝦夷地の拝領を老中に建議した際に使用した言葉で、鎖鑰とは錠と鍵を意味し、転じて敵の侵入を防ぐ要地を指す。(菊池、前掲書、275頁)。
- 34) 『北方領土五十年史 四島(しま)を追われて 元島民の手記』根室市総務部国際交流課領土対策係、1996年。その他、第二次世界大戦後の千島からの日本人強制退去に関する記録として『元島民が語るわれらの北方四島-ソ連占領編-』(千島歯舞諸島居住者連盟、1988年)がある。
- 35) 菊池勇夫『北方史のなかの近世日本』校倉書房、1991年、94頁(第I部第三章 近世アイヌの日本人認識)。
- 36) ウイマム(御目見得おめみえ)は、アイヌが産物を持って松前などに出向き、藩主などに贈り物をして、その返礼として和人の産物を持ち帰るといふ交易形態。オムシャは、和人の方がアイヌを訪ねる方式。ツクナイ(償い)は、紛争後の和睦の際に過料、償いとして物品を差し出すこと。
- 37) 松前藩に対する借金の代わりに、国後、根室で5カ所の場所請負人になった飛騨屋は、労働力としてアイヌを強制連行、酷使した。目に余る「密夫」や子供を背負ったアイヌ女性を煮殺すとか、アイヌを毒殺するとかいった類の恫喝に危機感を募らせたアイヌが、せっぱ詰まって起こした和人襲撃だった。この地域の長老格のアイヌたちは、ウルップに交易に出て事件当時は不在であったが、帰って後、松前藩の鎮圧隊に協力して蜂起した者たちを説得のうえ武装解除した。松前藩による37名の処刑は、彼らの予想に反するものであったろう。うち8名の首は塩漬けにして松前城下に運ばれ、曝されたという。
- 38) 1984年にフランスのブザンソンで見つかった「夷酋列像」には、多くの研究者が注目した。当時、月代を剃り、右衽(右前)が習慣であった日本人にとり、被髪や左衽は、夷風、すなわち「野蛮」を印象づけた。明ないし清朝の官衣である蝦夷錦に左衽(左前)があったはずはなく、恣意的に描かれているとの指摘がある。佐々木利和『アイヌ文化誌ノート』吉川弘文館、2001年、76頁。井上研一郎『「夷酋列像」と現代』(北海道・東北史研究会編『メナシの世界』北海道出版企画センター、1996年、252-255頁)。
- 39) 自国政府には無断で訪れたシャパーリンに対し、松前藩もまた幕府に報告せずに、翌年国後での回答を約束したが、国後では邂逅できず、再び厚岸を訪れたシャパーリンに外国との交渉は長崎である旨伝え、この交易申し入れは立ち消えとなった。(和田春樹『北方領土問題 歴史と未来』朝日選書、1999年、34頁。Stephan, "The Kuril Islands", p.62.)
- 40) 秋月俊幸「ロシアに漂着した日本人たち」、北海道日ソ友好文化会館編集・発行『日本人とロシア-その人物交流の足跡』1989年、46-47頁。
- 41) 菊池勇夫『エトロフ島 つくられた国境』、207-210頁。
- 42) ポーランド軍の武装蜂起に参加してロシア軍の捕虜となったベニョフスキは、カムチャツカに流刑になるが、船を奪い脱走する。その途中で立ち寄った阿波と奄美大島から長崎のオランダ商館長宛てに、事実を反した、ロシアによる日本北辺の侵略を警告した「ハンペンゴロウの書簡」を出した。
- 43) ベネディクト・アンダーソン『増補 想像の共同体 ナショナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、NTT出版、1997年、287、289頁。
- 44) 木村汎『日露国境交渉史』中公新書、13-14頁。

- 45) Stephan, "The Kuril Islands", p.61.
- 46) 菊池、前掲書、52頁。
- 47) 同上、54頁。
- 48) 同上、54頁。
- 49) 「北方領土」の領有を巡り日ソが対立すると、ソ連側から、ロシア人は、アトラソフがカムチャツカからクリルを望見した1697年以前の17世紀半ばから、クリルに足を伸ばしていたとする説も出てくるが、ステファン氏は、ロシア人がクリルの存在を知ったのは1690年代としている。(Stephan, "The Kuril Islands", p.38-42.)
- 50) 中野美代子『辺境の風景 日本と中国の国境意識』北海道大学図書刊行会、1979年、32頁。
- 51) ВЫСОКОВ, 《История Сахалинской Области》, с.54.
- 52) 菊池、前掲書、76-77頁。
- 53) 同上、64頁。イシュヨらは、ウルップでのロシア人の内紛を逃れて択捉に滞在していたといわれる。
- 54) 同上、84-85頁。
- 55) 秋月俊幸「千島列島の領有と経営」、『岩波講座近代日本と植民地』1、岩波書店、1992年、122頁。
- 56) 同上、123頁。菊池、前掲書、59頁。
- 57) 2002年8月23日、根室市北海道立北方四島交流センター、川口外務大臣と北方領土返還要求運動関係者及び旧島民との懇談会。
- 58) 中野、前掲書、41頁。
- 59) 根室市役所企画新興部北方領土対策室領土対策係『日本の領土・北方領土』根室市、北方領土問題対策協会、2001年、61頁。理由の第二は、両島が日本以外の国の主権下になかった。第三は、日露通商条約と樺太千島交換条約で、ロシアも両島が、日本固有の民族領土と認めている。第四は、カイロ宣言、ポツダム宣言第8項からソ連に両島の占領の権利はない。
- 60) 秋月、前掲論文、125頁。
- 61) 和田、前掲書、10頁。
- 62) 1792年にラクスマンが日本側から受け取った信牌(長崎入港許可証)を持って、1804年にレザノフが長崎に来航した。半年も待たされたうえ、皇帝の親書受け取りも交易も拒否されたレザノフは、部下に報復を命じて帰国の途につく。命を受けてフ
- ヴォストフ大尉とダヴィドフは、1806年に樺太、1807年に択捉で和人の番所を襲撃して幕府に大きな危機感を引き起こした。日本側は、1811年に千島を調査していたゴロヴニンを国後沖で拉致、その報復としてロシア側は高田屋嘉兵衛を人質にするが、双方の尽力で1813年に兩人ともに解放され帰国した。
- 63) 和田、前掲書、98頁。
- 64) 日魯通好条約第二条、日本外務省・ロシア連邦外務省『日露間領土問題の歴史に関する共同作成資料集』1992年、7頁。
- 65) МИД Российской Федерации/МИД Японии, «Совместный Сборник Документов По Истории Территориального Размежевания Между Россией и Японией», 1992 г., с. 9.
- 66) 樺太アイヌ史研究会編『対雁の碑 樺太アイヌ強制移住の歴史』北海道出版企画センター、1992年、43-44頁。
- 67) 木村、前掲書、64頁。
- 68) 樺太アイヌ史研究会、前掲書、43頁。
- 69) E.ファインベルグ『ロシアと日本-その交流の歴史』、小川政邦訳、新時代社、341、359-360頁。
- 70) チェーホフ『サハリン島』下巻、中村融訳、岩波文庫、1997年、30頁。
- 71) 日口外務省、前掲書、8頁。
- 72) МИД РФ/МИД Японии, «Совместный Сборник», с. 10.
- 73) 村山、前掲書、143-145、182頁。
- 74) 4基のうちの「神僕イサイヤ関藤右衛門之墓」は、ハリストス正教会の伝道者として大正初めに色丹に渡った宮城県出身の日本人のものである。
- 75) 小坂、前掲書、160頁。
- 76) 同上、186頁。
- 77) 大沼忠春・本田克代「色丹島の歴史-古代から明治5年まで-」根室市博物館開設準備室『根室市博物館開設準備室紀要』第11号、1997年、49、52頁。
- 78) 師範学校編輯『日本地誌略』文部省、1878年、26頁。
- 79) 秋月俊幸『日露関係とサハリン島 幕末明治初年の領土問題』筑摩書房、1994年、251-255頁。

- 80) J.H.スノー『千島列島黎明記』馬場脩・大久保義昭訳、講談社学術文庫、1980年、40、54、55頁。1868年に鉄道技術者として来日した英国人スノーは、1873年から約20年間千島水域でラッコなどの密漁を行い、上記の著書のほかに“Notes on the Kuril Islands” (1897)を残している。
- 81) セルギー『ロシア人宣教師の「蝦夷旅行記」』佐藤靖彦訳、新読書社、1999年、10、50-53頁。掌院は、ロシア正教会の主教職と司祭職の中間に位置する。セルギーは帰国後、ロシア革命後初の総主教となって、ソビエト政権下でのロシア正教会の生き残りに努めた。
- 82) 鳥居龍三『千島アイヌ』吉川弘文館、1903年、(『鳥居龍蔵全集』第7巻、朝日新聞社、1975年に再録、54、3頁)。
- 83) ステン・ベルグマン『千島紀行』加納一郎訳、朝日文庫、1992年、176、70-74、173、176頁。
- 84) 児玉作左衛門「アイヌの分布と人口」、アイヌ文化保存対策協議会編『アイヌ民族誌』上、第一法規出版株式会社、1969年、17頁。
- 85) 2002年7月29日、札幌にて元色丹島居住者のインタビューより。
- 86) 林欣吾「色丹島のアイヌ族」、大野笑三編『南千島色丹島誌』アチックミュージアム、1940年、162頁。
- 87) 秋月、前掲論文、130-131頁。1800年に初めて択捉に渡った近藤重蔵は、全島を7郷25村に分け、戸口調査を行い、その際には420人が和名に改めている。その詳細については、『根室市史』上巻、132-136頁。
- 88) Stephan, “The Kuril Islands” p.98.
- 89) 高倉新一郎「アイヌ政策史」、『アイヌ民族誌』上、72頁。田村貞雄「内国植民地としての北海道」(『岩波講座近代日本と植民地』1、95頁)には、「不完全な統計であるが」と断ったうえで、アイヌ人口は、1822年、24,339人、1854年、18,805人とある。
- 90) Stephan, “The Kuril Islands”, p.110.
- 91) 樺太アイヌ史研究会、前掲書、291頁。
- 92) テッサ・モーリス＝鈴木『辺境から眺める』、大川正彦訳、みすず書房、2000年、90、122-123頁。
- 93) 北海道付属島嶼復帰懇請委員会『択捉・国後・色丹・歯舞群島返還運動史 四島を返せ』1997年、2、4頁。
- 94) 小坂、前掲書、14、280-282頁。
- 95) 同上、245-253頁。
- 96) 北海道ウタリ協会アイヌ史編集委員会『アイヌ史資料編4 近現代資料(2)』北海道ウタリ協会、951-952頁。
- 97) 高倉、前掲論文、78頁。
- 98) 2002年8月24日、毎日新聞(北海道)。「アイヌ民族の秋辺さん 『返せ北方領土』の看板 川口外相の根室入りで」。
- 99) 「『アイヌ・モシリの自治区を取り戻す会』結成主旨。(アイヌ・モシリの自治区を取り戻す会編『アイヌ・モシリ アイヌ民族から見た「北方領土返還」交渉』御茶の水書房、1992年、327頁)。
- 100) 2002年8月30日、朝日新聞(北海道)、「ウタリ協会、北方領土の先住権主張へ」。北海道ウタリ協会は、1946年に社団法人北海道アイヌ協会として設立、1961年に現在の名称に変更。2003年12月1日現在、北海道在住アイヌ4,239人で構成される。(北海道ウタリ協会ホームページ)。
- 101) 2002年8月30日、朝日新聞(北海道)、前掲記事。
- 102) 『アイヌ史』北海道アイヌ協会・北海道ウタリ協会活動史編、北海道ウタリ協会、1994年、813頁。

(2004年7月20日原稿提出)

(2004年9月1日受理)

The Rise and Fall of the First Topos on the Kuril Islands: The Northern Territories and the Kuril Islands

Yukiko KUROIWA

Abstract During the Japanese-Soviet negotiations in 1955-56, the Japanese government began to insist that Etorofu and Kunashiri weren't included in the Kuril Islands, which Japan abandoned under the San Francisco Peace Treaty in 1951. Therefore, the Japanese government ceased using "the South Kurils" and began to call Etorofu, Kunashiri, Shikotan and Habomai "the Northern Territories." Along with the spread of the term "the Northern Territories," the role of the Kuril Islands as the stepping stones between Kamchatka and the east of Hokkaido, and the history of the indigenous people, the Ainu, have been forgotten. From ancient times to the present, there have been formations of three different toposes (places) on the Kuril Islands; the first is the community of indigenous people, the second is the Japanese society, and the third is the Russian society. This article is devoted to tracing the rise and fall of the first topos, which was collapsed in the process of the border demarcation between the two new modern states, Japan and Russia. This paper also deals with clarifying the historical side of the Northern Territories problem.

Key words The Kuril Islands, Northern Territories problem, border demarcation, Ainu, indigenous people